

2013年度社会構築論系
地域・都市論ゼミ2 ゼミ論文

「ハレ」と「ケ」が混合する重層的なまち
東京都渋谷区神宮前地区 原宿表参道の求心力の変遷を辿る

主査 浦野正樹教授

早稲田大学 文化構想学部
社会構築論系4年
浦野ゼミナール所属

1T100228-4 岡田佳菜

目次

序章 調査研究にあたって

- 序-1. 調査対象地
- 序-2. 問題意識, 調査目的
- 序-3. 調査方法および論文形式

1章 原宿表参道概要

- 1-1. 基本情報
- 1-2. 沿革・歴史
- 1-3. まちを支える骨組み
 - 1-3a. 渋谷区「神宮前地区まちづくり指針」
 - 1-3b. 商店街振興組合原宿表参道櫛会「表参道CI計画」

2章 都市の求心力に関する先行研究

- 2-1. 都市が有する要素
- 2-2. まちのアイデンティティーHIS三角形
- 2-3. 都市の求心力とは何か

3章 原宿表参道の情景

- 3-1. 遠藤周作『あかるく、楽しい原宿』
- 3-2. 筆者作『女3代原宿座談会』
- 3-3. 筆者作『とある日の原宿表参道』

4章 原宿・表参道の解体

- 4-1. 原宿表参道を形成する3大要素
- 4-2. 歴史年表 / 各要素の経緯
- 4-3. 契機年表 / 原宿表参道のあゆみ

5章 まちの全体像—原宿表参道の再統合—

- 5-1. 原宿表参道の求心力の解明
 - 5-1a. まちの人々の目に映る姿
 - 5-1b. 厚みを増し続けるレイヤー
 - 5-1c. ハレとケ、日常と非日常
 - 5-1d. 人々の交錯地点、神宮前交差点
- 5-2. 総体としての原宿表参道
 - 5-2a. 「洗練された、自分達のまち」意識とそのイメージ醸成
 - 5-2b. 原宿表参道が抱える課題と今後の姿.

終章 まとめ

- 終-1. 総括
 - 終-2. 謝辞
 - 終-3. 参考文献
-

序章 調査研究にあたって

序-1. 調査対象地

東京都渋谷区神宮前地区（「原宿表参道」地域）

なお、本論文では各種参考資料や研究協力者が用いるものに合わせて名称を揃えるため、対象地を便宜上「原宿表参道」と表記する。また、明治神宮の正式表記は「明治神宮」であるが本論文では常用漢字を使用するほか、必要に応じて略式表記の「神宮」も用いる。

序-2. 問題意識、調査目的

原宿表参道には連日数多の老若男女が訪れる。週末ともなるとその往来は人で埋まり、各々が思い思いに目当ての場所を目指して行き交っている。このまちには複数の要素が詰まっており、多種多様な人々を引き寄せる所以とも言うべきか、歩みを進めるにつれその表情はガラリと変わる。

かつて明治神宮とその参道を最大の骨格に据えて歩み始めたこのまちには長く語り継がれる、或いは今日に至るまで色褪せず残る建築物が次々と生まれ、独自の雰囲気醸成されてきた。その恵まれた下地と環境が、他のまちとの差異化を加速させていった。のちにファッションや音楽といった文化面で第一人者となる人の多くが、互いに刺激や影響を与えあいながら若かりし日々をこの地で過ごしたことは自然な流れであったと言えるであろう。

ハード・ソフト両面における多彩な構成要素ゆえに原宿表参道は強い個性を放ち、資本にも恵まれ高い注目度を維持し続けてきた。商業面でも多彩な通りと充実した店舗展開を武器に、大交通ターミナルを有する新宿・渋谷のような大規模商業地に匹敵するほどの人気や集客力を誇っている。当然、押し寄せる大勢の来街者の姿やまちの変遷といったものを長年見守り続けてきた住民達の存在も忘れてはならない。商業地と住宅地とが自然に混じり合っていることにもこのまちの面白さがある。そういったまちの特徴に更なる色付けを行うかのように、原宿表参道では一年を通して大小を問わず様々なイベントが開催され、そのイメージ構築や魅力向上に力が注がれている。

本論文では、上述したような原宿表参道の構成要素を、

・恒常性 ・牽引性 ・突発性

の三本柱に分類し紐解き理解したうえで再統合していくことで、人や物、資本を引き寄せる「求心力」の解明を行いたい。特に戦後、欧米文化が流れ込み日本全体で復興や経済成長が急激に進むなか、常に時代を牽引し最先端を走らんとしてきたその力強さの源に注目する。また、時代の流れを受けて噴出している問題群を解決する糸口を探るため、今後のまちの牽引者や来街者がこのまちの蓄積や性質・性格をいかに受けとめ、堅持あるいは刷新していくのかという視点を意識して論を進める。多方面から原宿表参道というまちを眺めることで、その重層的な在り方とハード・ソフトを問わぬ相互作用のメカニズムを浮き彫りにしたい。

序-3.調査方法および論文形式

【調査方法】

- ・文献研究
- ・商店街振興組合原宿表参道櫓会での短期インターンアルバイト
- ・まちの関係者へのヒアリング
- ・調査対象地域でのフィールドワーク

本論文執筆にあたり、まちの構成要素の幅の広さに対応するため、扱う文献も各分野から集めることとなった。原宿・表参道のまちづくりに言及した地域社会学の文献や地域史関連本はもとより、宗教社会学文献、日本建築学会論文、まちに所縁のある人々の手記、そして該当する雑誌・ムック本や文学/映像作品まで、その範囲は多岐にわたる。各文献、資料から会得したものを織り込んでいくことで、まちの多層性を可能な限りありのまま、描きだしたい。

また、地域の実態に迫るため、筆者は2013年春から約半年間、商店街振興組合原宿表参道(以下、櫓会)の事務局に所属し、その主催イベントである「原宿表参道元氣祭スーパーよさこい2013」の運営に携わった。その短期インターンアルバイト期間中に見聞きしたまちの姿や、そこで出会ったまちの方々へのヒアリング結果、フィールドワーク内容等を随所に差し込んでいく。なお、ヒアリングにご協力いただいた方々については以下に記載した通りである。

ヒアリングにご協力いただいた方々(順不同)

松井誠一氏(商店街振興組合原宿表参道櫓会理事長 株式会社松井ビル代表取締役)

松井洋子氏(松井誠一氏のご夫人 高知県観光特使)

福士隆郎氏(株式会社親和セブン 相談役)

植竹徹氏(公益社団法人日本看護協会)

江馬潤一郎氏(明治神宮 総務部長 禰宜)

江森純子氏(株式会社京橋千疋屋)

毛塚明氏(商店街振興組合原宿表参道櫓会事務局長)

遅澤一洋氏(原宿竹下通り商店会会長)

土田康博氏(原宿竹下通り商店会広報・販促担当)

【論文形式】

眺める地点、切り口のとり方によって全く違う顔みせる当該地域を扱うにあたり、論文展開については順列的な章立て形式をとらずに進めていく。1章で調査対象地概要や骨組みとしての指針・制度を確認したのち、2章ではまちの求心力に関する先行研究と論証の足がかりとなる概念を確認する。3章では、原宿表参道を題材にした遠藤周作の短編を一部引用するほか、原宿表参道を知る人々の架空の座談会や、実際に歩く視点でまちの様子をまとめたエッセイ調のものなど筆者が書いたフィクションを取り入れた。3章で読者の脳内に構築した共通のイメージが論文後半まで持続し、

読者がリアリティをもって本論文を読み進める助けとなることを願う。そして4章では構成の3本柱の概念を紹介したのち、歴史年表・契機年表とそれぞれに付随するまちの経緯概観を書き記すことで全体の流れを把握できるよう促す。4章に埋め込む事項については、文献によるものや基本理論に加え、ヒアリングで得た生の声、筆者がフィールドワークで発見した考現学的な片々等その出自は問わない。その後5章では4章までに解きほぐし、要素ごとにその在り方を述べてきたまちの姿の再統合を行い、原宿表参道が有する求心力や独自性とはどのようなものであるかを示す。本論文全体を通して複数の要素、レイヤーを偏りのない目線で理解し、その総体としての原宿表参道と変遷の過程、考えられうる今後の道筋を認識できるようにしたい。

1章 原宿表参道概要

1-1. 基本情報

東京都渋谷区神宮前1丁目～6丁目は面積約105.5ヘクタールの区域で、渋谷区西側の大半を占める最も広いエリアである。南北を明治通り、東西を表参道が走り神宮前交差点でその十字が重なっている。近くに目立ったオフィス街や大学、高校がないため原宿駅を訪れる人々の目的はもっぱら買い物であることが特徴で、文教地区指定を受けている。表参道、竹下通り、明治通り沿いに広がる商業エリアを除いてその他は住宅地である(佐藤・丸茂,2008)。

平成25年1月時点での世帯数は6,763、人口は12,256人となっており¹、神宮前地区は渋谷区全体と共に1972年から1997年にかけて人口が減少し続けたが、その減少率は渋谷区の約30%と比べて約50%と高い値を示していた。また1998年以降、渋谷区の人口が増加に転ずる一方で神宮前地区の人口は更に減り続けており、区内の他地区と比べても人口減少の激しい地区となっている。

1-2. 沿革・歴史

江戸時代～戦前までの原宿表参道

「原宿」「稲田」の名が史実に浮上してくるのは江戸時代、1590年の徳川家康江戸入府以降である。現在の渋谷区は江戸市街地建設計画において外郭防衛地帯の最西部、甲州街道の南側に位置しており伊賀衆の組屋敷が配置された。東行すれば四谷から半蔵門を経て江戸城へ直結できるよう計画されており、江戸の守りを固めていた。そのため、渋谷の台地上に数多くの武家屋敷が配置されることとなり、なかでも現在の千駄ヶ谷から原宿、青山通り方面には幕臣諸氏邸が密集していた。元々松平家、徳川家の土地が多かったことは、その後も名士の邸宅が造られていく下地となった。よってこの周辺は都心にしては大区画となっている。その一方で屋敷群によって現在の渋谷の台地上が充填されたことで西側の郊外農村地帯との文化交流は分断されてしまったために、土着文化の発生やその伝承を「原宿」「稲田」に見ることはできない。

経済活動の基盤となった江戸東側の守護を担うこの地域の暮らしの中心は、精米・製粉であった。

¹ 東京都総務局HP 住民基本台帳による東京都の世帯と人口(平成25年1月)より

葛飾北斎の作品「稲田の水車」にあるように、玉川上水の余水、渋谷川、三田用水の落水を使って水車が動く風景が至るところで見られ、その後明治期に更なるめざましい発展を遂げる。最盛期を迎え精米業を単なる納税手段からひとつの産業へと押し上げたのち、電力による精米業が普及する大正時代中頃まで回り続けていくこととなる。



資料1-1 葛飾北斎富嶽三十六景「稲田の水車」(山梨県立博物館HPより)

農業生産の面からいえば、渋谷全体がやせた土地であったため農民の生活は厳しかった。それだけに当時の人々の信仰心は厚く、そのことを表すかのように長泉寺(現神宮前6丁目)には石仏群が大量に造られた。また農民のみならず、下級武士にとっても江戸時代は苦しい時期であり、当時の物価高に耐えきれずに寺子屋の師匠となる者もあったという。しかしその教育面への移行が明治維新後の家塾や公立学校設立の下地になったことを筆頭に、「原宿」「稲田」の界限は江戸御府内と江戸郊外間の中継地として明治期以後の発展の下地を築きあげていったといえる。

1868年に江戸幕府が倒れ明治政府によって様々な施策がとられるなかで、旧武家地の没収が行われると旧領主に従って故郷に帰る武士が続出し江戸周辺の武家地は急速にさびれていったという。この危機への対策として政府はこれらの土地を桑畑や茶畑といった農地として再生させようと考え、「原宿」「稲田」もその計画下に置かれることとなった。また行政区画面でも変化は免れえず、武蔵知県、東京府と品川県下への分割といった紆余曲折の末、1889年の市区町村制施行をもってほぼ現在の形へと落ち着いた。

そしてついに、今日の街並み構築の最大の要因である明治神宮造営がなされる。代々木の原が広く、土質や景観が優れていること、明治天皇が生前好まれていた土地であること等から選ばれた原宿への造営は1915年に着工し、5年の歳月を経て完成した。そして神社の森である内苑と、スポーツ施設を主とする記念公園としての外苑との連絡道として造られたのが表参道と裏参道である。神宮南入口と青山6丁目とを結ぶ表参道、神宮北口からJR山手線をくぐり外苑へと続く裏参道は共

に堂々と完成し、裏参道は乗馬道をもつ優雅な公園道路として当時注目を集めた。

昭和に入り1932年の区制施行を迎えたこの地は「千駄ヶ谷」「渋谷」「代々幡」の三町が合併し渋谷区となり、現神宮前の区画内は「原宿」「稲田」に「竹下町」を加えた3つの町名をもつに至った。この頃には農業の色が殆どなくなり、地域の大部分は住宅地となった(半田,1994:89-92)。

1-3. まちを支える骨組み

1-3a. 渋谷区「神宮前地区まちづくり指針」

「神宮前地区まちづくり指針」(平成24年策定)は渋谷区の計画的な行財政運営の指針である「渋谷区基本構想」(平成8年策定)を継承する「渋谷区都市計画マスタープラン」(平成12年策定)を実現する具体的方策として、今後の神宮前地区のまちづくりの方針を示すものである。

◆平成12年3月に策定された渋谷区都市計画マスタープランでの原宿・表参道地域の位置づけ

・原宿駅前付近……………「**特色ある商業拠点**」

ファッションを中心とした情報発信地としての特性を活かしつつ、表参道や明治神宮の景観や緑と調和した魅力ある拠点形成を目指す。

・神宮前三・四・五丁目付近……………「**住居系市街地ゾーン**」

住生活を支える生活サービス機能の充実を図り、住み良い定住環境の形成を目指す。

・神宮前一・二・六丁目付近……………「**住機能を中心とする複合系市街地ゾーン**」

住機能と商業・業務機能が良好な環境のもとに共存する、活気ある市街地の形成を目指す。

・明治通り……………「**都市軸**」

住機能との調和に配慮しつつ商業・業務機能の強化を図る

・表参道と旧渋谷川(旧稲田川)……………「**みどりと水の空間軸**」

明治神宮や新宿御苑周辺等をつなぐ自然資源

上記のマスタープランからは、都会には稀有なほど豊かな緑に恵まれた良好な環境のもと、住宅地と商業地がそれぞれに、或いは同居するかたちで拡がるまちの姿がみえてくるであろう。また、原宿駅、明治通り、表参道といった地点や通りがまちの要所となっており、ゾーンの境目を示す役割を果たしていることもわかる。

近年における表参道沿道の大規模商業施設の建設、地下鉄副都心線乗り入れ開始といった変化はこの地域の利便性の更なる向上に繋がった反面、地区内の住宅地では商業・業務店舗の染み出しや地価高騰、それに伴う人口減少といった問題も起きている。大手資本の参入が続々となされるなかで、まち全体として景気や地価の高低の影響を受けやすくなっていることも考えられる。また年齢層別人口割合を参照すると、高齢人口割合が神宮前地区22.9%、渋谷区は18.9%となっており、高齢層住民の割合の高さがうかがえる。止まらない人口の流出と共に、取り残された住民の高齢化が進みつつある。

このように地区の課題は複数あるが、その最たるものは商業・業務機能と住機能の調和である。商業地での健全で活力ある商業空間の維持・向上と住宅地での良好な住環境の維持・向上を両立させ、双方を効果的に進めていくことが求められている。

以下の「神宮前地区まちづくり指針」は原宿神宮前まちづくり協議会から区へ提出された「神宮前三・四丁目地区 地区計画等の案等の申出書」(2006年)、「都市計画道路補助164号線見直し要望書」(2008年)を受けてそれらを受け、今後のまちづくりの指針の検討と実現に向けての対策を示すものとして策定されたものである。なお、ここではその目標と方針、概要を紹介するにとどめる。

◆まちづくりの目標

- ① 便利で快適な都市型住宅地の形成
- ② ファッションブルな生活文化を創造する魅力ある商業空間の形成
- ③ 市街地の特性に配慮した景観づくり
- ④ 旧渋谷川(旧稲田川)の魅力ある空間の整備
- ⑤ 災害に強いまちの形成

◆まちづくりの方針(進め方)

- 1, 現行の都市計画マスタープランに描かれた将来構想をベースに、近年の社会・経済情勢や土地利用の動向等を踏まえ、住宅地や商業地としてのそれぞれの課題に対応しながら、達成可能な将来像を想定する。
- 2, まちづくり指針で描いた将来像を区民、企業、区が共有していく。
- 3, 地区計画制度の適用を基本手法としつつ、都市計画道路の見直しを行うとともに、区のまちづくり制度等様々な手法を活用する。

◆指針概要

土地利用の方針…対象区域を10地区に区分し、それぞれの現状や特色に配慮して作られたもの

道路ネットワークの方針…自動車ネットワークと歩行者ネットワークの二軸での道路整備水準の向上。商業空間・生活空間を寸断することなく災害緊急時に備えると同時に、まちの賑わいや歩行者の回遊性を高めることも含めた「ネットワーク」の形成を促す。

景観形成の方針…市街地や地形に配慮したうえでの、区のシンボルとなる景観資源形成の保全と活用。具体的には、大規模な建築物の整備の際にその形態・色彩などのデザイン、高さ等について、大きなスケールを感じさせない配慮により、基調となる住宅地の景観との調和を図ることや、まちなか巡りの魅力向上のため、回遊ルートごとに建築物やみどりの配置、屋外広告物等に関する自主的な独自ルールづくりを推進し、景観形成の促進を図ること等である。

みどりの環境づくりの方針…明治神宮や代々木公園といった緑の大拠点の最大限の活用。上記二か所に加え、公共公益施設や小中学校、寺社等を緑の拠点として育成し、敷地内緑化や沿道緑化をもってそれらを繋ぐことで緑のネットワークを強化する。

防災まちづくりの方針…避難場所である「明治神宮・代々木公園一帯」「青山学院・実践女子大学一帯」への主要避難経路を、幹線道路へ繋がる主要道路にとり空間確保や落下物による道路閉塞防止に努める。

住宅供給の方針…「都心居住についての基本的考え方」「神宮前地区における住宅施策の考え方」の二つ。渋谷区全体の課題である「定住できるまちと副都心を有するまち」の調和を目指すべく、良質な住宅の供給と居住安定のための支援を行う。特に神宮前地区は、「住宅マスタープラン(平成23年)基本方針3(2)良質な民間住宅の供給促進」において「②神宮前地区周辺などの人口減少が著しい地区では、都市の利便性を享受した住まい方ができるように、地区計画等の活用により良質な住宅供給を誘導します。」と位置付けられており、地域の利点を活かした住宅地の提供が求められている(神宮前地区まちづくり指針,2012)。

上記のような各種方針と土地利用・建築物の現況を基に地区計画が更に細かく決められている。行政から提示されている指針は、まちづくり協議会からの提案書を参考に練られていることもあってかなり具体的な部分まで踏みこんだものとなっており、まちの特質や弱点をよく掴んだものであるといえるであろう。歩行者の回遊性への注目や緑のネットワーク整備といった積極的な計画を提示する一方で、まちの景観を守るための策や住宅地への意識を忘れない提案軸など、動と静を混ぜ込んだものとなっている。

1-3b. 商店街振興組合原宿表参道櫛会「表参道CI計画」

商店街振興組合原宿表参道櫛会(以下、櫛会)は、1973年に発足した商店街振興組合である。発足当時は原宿シャンゼリゼ会という名称であったが1999年に改称し、現在は216社の会員を抱え、加盟店舗数は約800にのぼる。表参道等に出店する外資系ブランドも数多く包括している。

櫛会が提示しているのが「表参道CI(シティ・アイデンティティ)計画」である。これは今後より一層個性的で魅力的な街を作っていく為の枠組および目標であり、方向性としてMI(マインド・アイデンティティ)やVI(ビジュアル・アイデンティティ)が創出される。このビジョンのもと、表参道を舞台とし、メインアクター・アクトレスを来街者、サポーターをそこで働く人々とする舞台装置構図がうまれた。役者と観客がいつでも入れ替わることのできる自由な参加劇が繰り広げられる場所を目指している。

CI計画実施経緯

CI計画実施に至る表参道修景事業の発端は、1982年に原宿シャンゼリゼ会が建設局道路管理部長にその実施を陳情したことである。その後1990年から表参道修景基本計画検討委員会が開かれ、景観工学の中村良夫氏(東京工業大学工学部教授)を筆頭とする学識経験者、警視庁、東京都、渋谷区からの構成メンバーのもと、討議が重ねられていった。並行して、計画の経緯や地元負担金の概要を説明する原宿シャンゼリゼ会協議や、交通安全対策全般に関する警視庁協議も

進められた。そして同会は1993年4月、基本計画に基づき東京都中小企業振興公社へCI計画(中小商業活性化推進事業)の申請を行うに至った。

CI計画とは

そもそもCI計画とは、会社や団体といった組織においてその活動の目的や特性を明解にし、関係者の意識統一、社会への提示工夫を行う「コーポレート・アイデンティティ(CI)計画」のことをいう。これを一つのまとまりや特性を持つ地域にあてはめ、地域の目指す目標やビジョンを明確にし、その実現へと動くため指針とするものが「シティー・アイデンティティ(CI)計画」である。行政でいうところの「まちづくり計画」であるが、あえてCI計画とするのは検討主体が原宿シャンゼリゼ会という沿道商業者の集団であり、その商業戦略上の意図も踏まえた計画であるからである。原宿シャンゼリゼ会が発行したCI事業報告書『原宿1993』には以下のような説明がある。

「CI」を明確化し、意識し、具象化することにより、そこから受ける印象は強いものとなり、自然にその場所にふさわしい都市活動がモノ、ヒトともに起きてくる。そうした事はそこに住み、働き、学び、遊ぶ人達の行動や気持ちを生き生きとしたものにし、豊かにする事ができる。それは雑音のない壮大な交響曲のようなものであり、楽想にあった旋律と和音の構成が無駄なく、一個一個の楽器の奏でる音が調和して作り上げるシンフォニーに似ている。そして、興奮、感動、連帯…といった気持ちに奏者も聴衆も溶け込み、そこから新しいイメージーションやドラマが生まれていくのである(原宿シャンゼリゼ会,1994:5)。

「壮大な交響曲」という表現は数々の要素と人々とで構成される原宿表参道の特徴をよく掴んだものであろう。そこにあるのは一方的な関係性ではなく、感情や景色を共有しながら相互作用的にまちを変化させていく姿である。

原宿表参道のCI計画

CI(シティー・アイデンティティ)……都市を象徴する様々な減少が集まり、交錯して創り出される街
流行に敏感な人々を魅了する街

MI(マインド・アイデンティティ)……人々を生き活きと、女性を美しくさせる

VI(ビジュアル・アイデンティティ)……歴史を象徴するシンボル(灯籠、けやき)は尊重する
現代デザインの先端に行く
高品位な情報を発信して行く

CIに関してはゼロから新たに掲げられるものではなく、既に過去の時間的積み重ねによって大体の輪郭が形づくられている在り方を言語化したものであり、そのハイブリッドなアイデンティティは変わらぬ継承が望まれている。CIに基づき好ましいものは助長し、好ましくないものは排除していくことでその明確化を進めていく。

キャッチフレーズとも言い換えられうるMIは、物中心ではなくあくまで人間を注視し舞台として気持

ちよく佇むことのできる環境があることが人々の来街目的のひとつであるとする考え方からである。人間中心の街をつくる精神とは何であるかを改めて問い直す必要があるであろう。

VIはまちを訪れる人々に落ち着きや安らぎを与えているケヤキや灯籠を守っていくことで人間中心の舞台を保ち続けること、目まぐるしい表面上だけの流行でなく器としてのデザインを常に考えていくことの指針となっている。そして扱われる商品から交わされる会話、人々の足の運びといった非常に広範囲かつ意識的な全般活動を高品位に保つことで、それらをより分かりやすいかたちで発信していくことを示している。

表参道という舞台とそこに立つ人々

表参道は約1キロメートルという適度な長さを有し、幅約6メートルの歩行者空間は歴史的重みを醸し出すケヤキ並木を主軸とする豊かな緑と、時代の流れに敏感な沿道店舗という全く異なる二つの要素に挟まれている。CI計画においては、その町並みを背景としてメインアクター、アクトレスである来街者、サポーターである働く人々が立ち動き、新旧の摩擦がエネルギー源となる舞台を描く。原宿表参道を語るうえで欠かせない「ファッション」は行動や服装、言葉や情報といった様々なかたちで表現されるものだが、その表象方法は違えども「見せる」「見る」の関係は常に発生している。自由な表現によって本人すら気づいていなかった本質が思いがけず発現することもある。

解放的とは言い難い日本文化にあって、「見る」→「見られる」という一方的な視線の動きで終わるのではなく、「見る」⇔「見せる」という瞬間的に立場が入れ替わりうる相互的な視線の交錯を生み出せるのは表参道という舞台があってこそのものである。見られる「役者」と見る「観客」とが自由に入れかわる「自由な参加劇」がより活発に繰り広げられることを目指し、その後押しをするのがCI計画である。目指す姿に相応しい舞台装置を提供するために、その整備には普遍性と変化の許容という二面性が必要である。表参道のイメージを形づくる普遍的なものとしてあげられるのは街路長、歩道の広さ、緑、並木と沿道店舗の高さといった固定的景観と、変化を体現するような沿道店舗である。普遍的要素のなかに「変化を許容する」という流動的要素が組み込まれていることに意義があり、変化の許容自体が普遍性の一部であるかぎり、この舞台は目まぐるしい変化に対応することができる。CI計画で明確化されたフレームイメージをまとう表参道。その舞台に足を踏み入れた人であれば誰でも、他者からの刺激を受けながら自らも自身を演じ、時には新しい発見をすることができる(商店街振興組合原宿シャンゼリゼ会,1994:4-8,57-59)。

2章 都市の求心力に関する先行研究

2-1. 都市が有する要素

原宿表参道は首都東京という「都市」のなかに位置する。その全体像を見るにあたり踏まえておくべき都市の要素を複数の先行研究から引用し、確認しておきたい。

都市は、住む人、訪れる人、思いを寄せる人など、ありとあらゆる人々の共同作品であり、今現在生きている人々だけでなく、かつてそこで時を過ごした人々や歴史の記憶、未来をそこで生きることになる人々の空間、所有物でもある(橋爪,2002:27)。

また、若林(2003:15)は都市がもたらす経験や感覚とは「地域や階層や世代を超えて現代の社会や都市に生きる個々の人びとの間に分散し、それぞれの人びとの生活の、言ってみれば共通の地平のようなものを作りながら、個々の人びとによってきわめて個人的なものとして」捉えられるものだと述べている。ひとつひとつの要素はそれぞれに世代や階層といった枠組に属する一部の人々によって占有されるのではなく、あらゆる人々に知覚され認識されたうえで集合体としての都市を形成しているのである。

更に、都市を都市たらしめる特徴として常に変化しており一刻として空気がよどまない点も挙げられる。いたるところに変化があり、若者や志のある人々はその不断のうねりのなかに潜む隙間やチャンスの可能性に引き寄せられるのである。建築家黒川紀章は、都市の実体とは動き変化するその過程自体であり、それは永久に完成しないと語っている(清水・服部,1970:79-80)。ある時代に何らかのアクターが都市のある側面・要素を構築したとしても、それが永続的に都市の顔として表舞台上に居座り続けることはない。終着点なく変わり続けていくからこそ正統となる時代はなく、都市という共通項のもとに時間や場所の隔たりを越えて人々が集い、互いに通ずることができるのである。

2-2. まちのアイデンティティー-HIS三角形

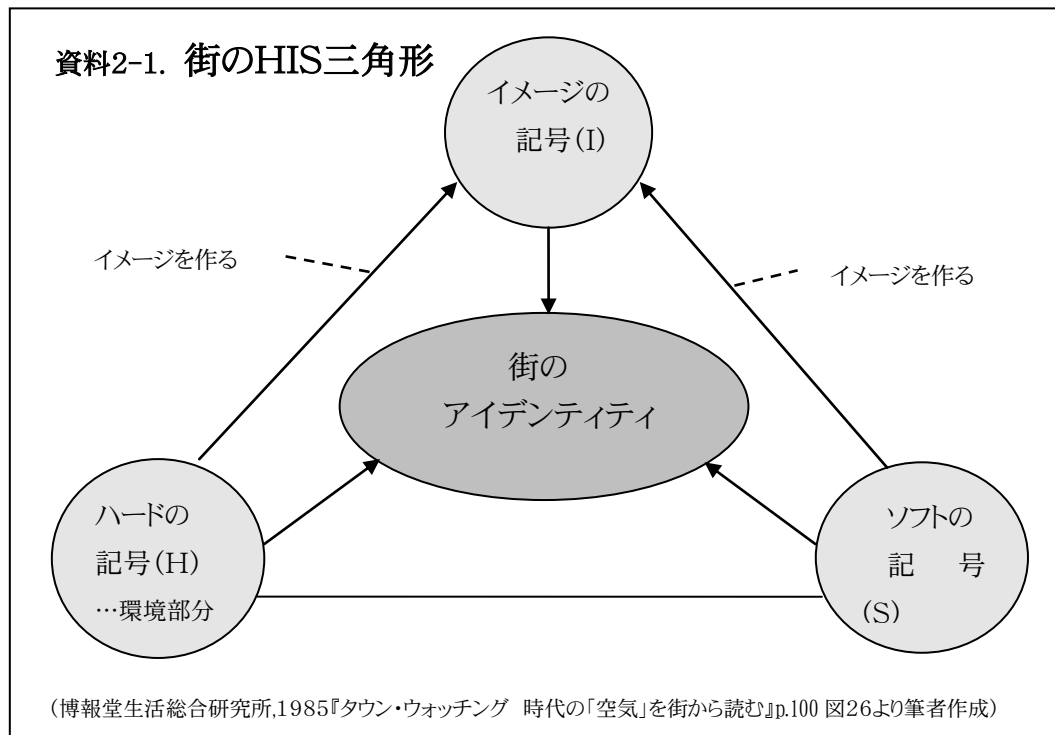
博報堂生活総合研究所は『タウン・ウォッチング 時代の「空気」を街から読む』において、まちのアイデンティティを構成する要素として、ハードの記号、ソフトの記号、そしてその二つの記号から導き出されるイメージの記号があるとしている。各記号は以下のようにまとめられる。

ハードの記号…入れ物の記号。自然や街並み、建物といった環境部分

ソフトの記号…その街に住んでいる人の気質やタイプ、伝統行事といった演出部分

イメージの記号…ハードの記号×ソフトの記号の掛け合わせによって醸し出される街の雰囲気
歴史的な風土の特質とも言え、この部分が知識・情報として伝播していくことで、ハード記号やソフト記号を体験したことのない他所者のメンタルマップにも、何らかの形でその土地のイメージを醸成することができる。

ハードの記号はゼロから新たに人工的計画的に作り出すことができるが、まちを住みこなし、使いこなすソフトの記号という裏付けがあるからこそまちに「らしさ」の匂いがもたらされ、それらがイメージ記号に集結していく。入れ物だけでなく観念だけでなく、ハード、ソフト、イメージの三角形が揃って初めて作りあげられていくのがまちなのだという(博報堂生活総合研究所,1985:99-101)。



2-3.都市の求心力とは何か

都市が人々を惹きつける力については、数々の先行研究がその源や条件を探ってきた。その呼び方も「磁力」「魅力」「求心力」と様々である。

例えば福川・市川(2008)は、訪れる度に新しい発見や出会いがあり、何度でも訪れたいくなるような場所のことを「強い磁力をもった磁場」だとして、そういった磁場がたくさん集積している都市こそが魅力ある都市であると述べている。都市の磁力は磁場の「数(幅)×質」で決まり、数(幅)と質双方が揃って初めてそこは理想の都市であるとする。なかでもパリ、ニューヨーク、ロンドンといった世界都市は各分野における「オンリーワン」と「ナンバーワン」を数多く持っており、政治や経済に限らずファッションやアートなども含む様々な分野における希少性や先端性、象徴性、偉大さといった強い磁力で人を惹きつけているとしている。世界都市としての条件は強い磁力を持った磁場が多層多重に集積していることであり、集積が集積を、情報が情報を呼ぶ拡がりのなかで化学反応のような新しい結合が起こる場こそが人や企業、資金を惹きつける強力な磁場であるとみなされる(福川・市川,2008:34,39)。

ほかでは味わえない、経験できないようなものがある都市に人は惹かれる。高度な情報化社会のなかで人々の五感(ごかん)は磨かれ肥えていく一方であり、その興味関心を引いて足を運ばせるためには近年ますます高い質が求められるようになってきている。感性や価値観(たかかん)の範囲も拡がる一方であるからには可能な限り広い間口と、それぞれの深みや質の高さが必要であるといえよう。

3章 原宿表参道の情景

3-1. 遠藤周作『あかるく、楽しい原宿』

日曜名作座 遠藤周作短篇集「その夜のコニヤック」より

第一話 「あかるく、楽しい原宿」

平成元年4月16日(日)21:05～21:35第一放送 NHK放送台本

脚本 佐藤ひろみ 出演 森繁久彌 加藤道子

喫茶店ノイズ

ナレーション

その日私は、小橋直子と原宿の喫茶店で、通りを行き交う若者たちを眺めながらお茶を飲んでいました。彼女は私の学生時代からの、数十年来の知人である。婦人雑誌の名編集長といわれた彼女は、今は職を辞し彼女と逢うのも久し振りだった。

私 原宿って街はなんだかおもちゃ箱みたいだなあ

直子 ほら、あのミニスカートの子、足がスーッと真っすぐで長いわねえ

私 伸び伸びと育っているんだな。みんな屈託のない顔をしてるよ
アンタ、あんなミニスカートなんかはいたことがないだろう

直子 私が、娘の頃はみんなモンペだったもの

私 戦争中だったものな、俺たちの青春時代は

直子 昭和二十年五月二十四日——あの日のことは、忘れないわ

私 東京大空襲ね

直子 当時の新聞にはね、『敵機東都来襲 多少の被害ありたるも』って書いてあった
冗談じゃない。多少なんてもんじゃないわ

私 まる焼けだったよ東京は
渋谷の道玄坂の高台から赤坂や霞ヶ関あたりまで見通せたよ

直子 私は空襲の翌朝、この原宿で数えきれない程の死骸を見たわ
みんなひどい姿になって——

私 今の、このあかるい街が嘘のようだ

直子 そこの、表参道の入口ね、銀行のある十字路のあたりね

私 ああ

直子 そこに死体を集めて焼いたのよ
その死体から出た油が黒くしみ込んで、その黒いしみが戦後しばらくの間消えなかったのよ
あら、やあね、久し振りに逢ったのに、どうして戦争の話になっちゃったのかしら

私 ふと思い出す過去のこともなんともものは、たいがいろいろでもないことが一番最初に浮かんでくる
もんなんだ

…以下略…

3-2. 『女3代原宿座談会』

祖母 62歳, 都内にて一人暮らし

母 40歳, 郊外在住

娘 15歳(中学3年生), 郊外在住

母 3人で原宿に来るのは、初めてかもね

祖母 そうねえ確かに。あなたが女子大生だったころは時々お茶をしたものだけれど

母 大学が渋谷にあったから学生の頃はよく買物をしていし、就職してからも休日に遊びに来ることが結構多かった気がするけれど、子どもが生まれてからはさっぱりだったかなあ。何しろ休日は混んでいるから。人混みに小さな子どもを連れだすもんじゃないって、お母さんに常々言われていし。でもさっき、表参道を歩いてきたらベビーカーを押した若いママさんが沢山いるから驚いちゃった。いつもこうなの？

娘 うん、あたしはあんまり驚かないかな。竹下通りは、あたしくらいの子ばかりだけど

この前、おばあちゃんと原宿来た時は、明治神宮行ったよね。お参りに。あんなに広いと思わなかったよー。あれ以来行ってないけど、また行きたいかも

祖母 そう？帰りに寄っていてもいいのよ

おばあちゃん、若い人のお店わからないから表参道歩くと疲れちゃうのよ
昔は一日中いられたのにねえ

娘 えっ、おばあちゃん原宿に通っていたことあるの？

母 おばあちゃん、裁縫上手なの知っているわよね

昔は洋服縫ったりしていたんだよ、言っていなかったっけ？

祖母 田舎から出てきて、その頃はまだ全然建物もなかったけれど洋服を作っているところは沢山あって、私もお裁縫は一通り習っていたからね。原宿には毎日のように通っていたのよ。あの頃の方が、奇抜な格好をしている人が多かった気もするわね。ツツツした人が多くてね。

娘 すごーい。ここで働くなんて、超おしゃれだよ。いいなあ

母 でも今も、原宿にいる若くて細い男の子達は、おしゃれな子が多いのね

パパも、竹下通りみたいなごちゃごちゃした感じは勘弁していつてるけど、表参道ヒルズが出来てからはちょっと興味出てきたみたいよ。千代田線があるおかげで結構来やすいしね

祖母 ほんと、今は地下鉄がたくさん入ってきていて便利よね

娘 おばあちゃん、パンケーキ食べたことある？はやってるんだよ

祖母 ないわね。そんなところがあるの

母 いやね、どこもいつだって長蛇の列なのよ。1時間くらい待つんだから

私がよくお茶したのは、千疋屋とかコロバンだったけど。

祖母 あら、そっちの方が懐かしくていいわね。久しぶりに行きたいわ。

…続く (終)

3-3. 『とある日の原宿表参道にて』

ここではエッセイ調にまちの姿を描き出し、筆者のイメージを読者と共有する材料としてその後の論文展開への導入としたい。同日同時間に異なる場所にて移動・または滞在する人々の姿を追い、それぞれの目線で原宿表参道を眺める。その登場人物は、学生(来街者)、修学旅行生(来街者)、リタイア後の元会社員(元通勤者)といった様々な層の人々である。同じ原宿表参道のまちの中での出来事のため、彼らは時に同じ光景を目にし、その移動経路が交わる地点では同じ場所経験をもつこととなる。

—4つの目線—

都内大学生A(20歳・男性)

修学旅行生B(15歳・女性)

元会社員C(67歳・男性),

原宿表参道勤務者D(22歳・女性)

原宿表参道住民E(39歳・男性)



資料3-1 現在のJR原宿駅前(筆者撮影)



資料3-2 1952年2月のJR原宿駅前(樺会資料)

◆都内大学生A(20歳・男性)

東京メトロ千代田線明治神宮前駅を出て、JR原宿駅表参道口前の短い横断歩道へと向かう。点滅しかけの信号を見て慌てて渡ろうとすると、沿道に立つ工事作業員の背後にある看板にふと目がとまった(資料2-3)。どうやら**駅前の歩道橋**が撤去されるらしい。表参道は左右の通り沿いにチェックしたい店が点在しているので、両サイド間での移動が少なくない。割と車両通行量が多く簡単には渡れないので、表参道にかかる幾つかの歩道橋は重宝していたのだが。こんなにあっさり撤去とは、

少しさびしい気もする。



資料3-3 東京都建設局の「歩道橋撤去工事」の看板が見えるJR原宿駅前(筆者撮影)

そんなことを考えながら表参道方面へ先を急ぐと、最早このまちに来るとお馴染となった甘い香りが漂ってくる。甘ったるいキャラメルポップコーン(資料2-4)の香りは、いつもむせかえる程の強さである。彼女いわくあの甘さとかわいいパッケージがたまらないらしく、平日でも1時間半待ちという行列(資料2-5)にしばしば並んでいるそうだ。理解しがたい。そういえば先日、今表参道で大流行しているというパンケーキ屋に連れていかれたが確かあそこにも長い行列ができていて、デートとはいえずんざりしながら順番を待ったのだった。



資料3-4 ポップコーン店“Garrett”(筆者撮影)



資料3-5 ポップコーンを買い求める行列(筆者撮影)

表参道のケヤキ並木に視線を移すと、紅葉のもとにズラリとフラッグ(資料2-6)が下がっている。そういえばこの冬は2年ぶりにイルミネーションが復活するらしく、その告知フラッグのようだ。もうそんな季節か、今年のクリスマスはどうしようかとあれこれ思いを巡らせながら歩いていると、交差点に着いた。ちょうど信号が青になった横断歩道を渡り、東急プラザ前に立つ。彼女は渋谷の大学に通っているため、原宿へは明治通り沿いに宮下公園の前を通って来るルートと、公園通りを使ってNHK前から原宿駅の方へと回ってくるルートとがあるが、今日はここで待ち合わせだからきつと前者を選ぶだろう。

何気なくスマートフォンの画面から目をあげると、信号が変わって一斉にこちらへと向かってくる人波の中で一点、鮮やかな色が目に飛び込んでくる。母親とおぼしき女性に手を引かれている、真っ赤な着物の女の子である。明治神宮で七五三だろうか。原宿には、同年代とはいえついまじまじと眺めてしまうような奇抜な服を着て歩く若者や勧誘をするおしゃれな美容院スタッフなど、人々の服装には色が溢れているが、そんな中でも女の子の赤はよく目立っていた。彼女が来たら七五三の着物は何色だったか聞いてみよう。天気もいいし、今日は明治神宮に寄ってから帰ってもよいかもしれないと考えながら、彼女が現れるであろう左方に目をやった。



資料3-6 表参道の櫛の木の下に見えるフラッグ(筆者撮影)

◆修学旅行生B(15歳・女性)

JR原宿駅を出て、風船で彩られた竹下通りのゲートをくぐった。右も左もまるで色の洪水で、赤・青・黄…様々な蛍光色が眩しい。雑誌で見たとおりだ。ここには何でも揃っている。人気のクレープ屋も、誌面でチェックしていた場所にきちんとあった。少し気持ちが高ぶっているのを抑えながら、一番人気だと雑誌に書いてあったものを注文する。

クレープを食べながらぶらぶらと歩いていると、看板を手にした黒人に流暢な日本語で話し掛けられた。買い物の楽しさに夢中になり、通りを歩き始めた頃の警戒心が緩んできたところだったので予想外のことに驚き、逃げるように先を急いだ。

目に映るものどれもが魅力的で、お小遣いの残金を計算しながら洋服や雑貨を買い込む。ひとつひとつのお店に入り、隅から隅まで目を通して歩いてきたので随分と時間がかかってしまったが、隣を歩く友人も満足そうな表情を浮かべている。

後ろ髪をひかれる思いで通りの端を告げるゲートをくぐるとひっきりなしに車が通る広い通り²に出た。コーヒーの香りが漂ってくる方向に目をやると、右手には緑色の看板が見える。ぶつかった通りに先程までの色の鮮やかさはなく、デンと構えた大きな店の前を雑誌やドラマに出てくるような大人が通り過ぎていく。急に居心地の悪さを感じ、人が大勢集まっている方を目指して足早に歩き出した。ほどなくして着いた交差点には、同じくらいの歳の女の子が信号待ちをしており、少しほっとしてその人並みに紛れた。

前を見ると、道路越しのクリスマス装飾がされた綺麗なビルの前にすらっとしてかっこいい男の人が立っているのが見える。少し遠いが、目を凝らして見ると大学生だろうか。この街でああやって慣れた感じで誰かを待っている姿には憧れる。東京ってやっぱりいいなあ、と隣の友人に話しかけた。

◆元会社員C(67歳・男性)

JR原宿駅を出て、横断歩道を渡っていく大勢の若者達を横目に明治神宮へと向かう。ここには日頃から妻と二人、菖蒲を愛でるために訪ねたり森林浴も兼ねて参拝をしたりと日常的に足を運んでいるが、今日は賑やかである。孫娘が七五三を迎え、娘一家と共に正装で向かっているのだ。

もう40年以上前の話になるが、仕事の取引先が原宿にあったという縁でこの地にある明治神宮で結婚式を挙げたことが懐かしく思い出される。

² 明治通りのことである



資料3-7 七五三詣のために明治神宮を訪れる家族(筆者撮影)

七五三詣を無事に終え(資料2-7)、神宮内の文化館で昼食をとろうかと提案すると、行きつけの店があるから行かないかと娘が言う。そういえば彼女は孫娘がベビーカーに乗っている頃からしばしば表参道に遊びに行っているようだった。着物に草履の孫娘が気にかかったが、せつかくの天気なので行きつけの店とやらを目指し、表参道を歩いて行くことにする。かつても取引先を訪ねる度に思っていたが、この街には不思議な服装に身を包んだ若者が沢山いる。当然ながら流行はすっかり変わっただろうが、思い思いに表参道を闊歩する雰囲気はあの頃とちっとも変わっていない。



資料3-8 昭和49年当時の神宮前交差点の様子(榎会資料)

神宮前交差点で信号を待っていると、地方から来た修学旅行生とおぼしき制服姿の女の子二人が隣に並んだ。各々両手に色鮮やかな袋を持っているが、自由時間に買い物でもしたのだろうか。少しばかりそわそわと、浮足立っているような印象を受ける。孫娘もきつとすぐこの子たちのように大きくなるのだろうと、つい目を細めて見つめてしまった。

信号が青になり、彼女たちは人の多さにきょろきょろしながら横断歩道を渡り始めた。先を歩く娘が振り返る。私たちが目指すお店は、もう少し先にあるらしい。

◆原宿表参道勤務D(22歳・女性)

埼玉の自宅から副都心線直通電車に乗り、職場へと向かう。東京メトロ明治神宮前駅は土日祝日こそ急行が停まるものの、平日午前中の乗降者数は渋谷や池袋に比べると少ない。7番出口を出るとそこは明治通りで、今日も手の込んだ服装に身を包んだ20～30代と思しき男女が目の前をぐんぐん進んでいく。サラリーマン然とした姿は殆ど見られないがどの人もこの時間から仕事に向かうようだ。神宮前交差点まで行って信号待ちをするのがもどかしいのか、通り過ぎる車の波が途切れた瞬間を見計らって足早に道路を渡っていく人も多い。

立ち並ぶショーウィンドーを横目で見ながら渋谷方面へと歩を進め、長泉寺の前を通り過ぎる。奥まった境内を覗くと猫が追いかけてっこをしていることもあるこの寺から、正装した老夫婦が出てくるのに出くわすことがしばしばある。店舗の入れ代わりの激しい明治通りにあって、この寺の醸し出す雰囲気は独特だ。

と、ここで用事を思い出したと立ち止まる。榊会事務局に書類を受け取りに行ってから出勤することになっていたのを忘れ、ついいつものルートで歩き出していたのだった。足早に引き返して神宮前交差点に着くと信号は赤。信号待ちをしながらぼんやり周りを見ていると、背後の三角スペースに建てられた小さな店舗が目がとまり、改めて眺めてみる。近いうちに退去するらしいこの少々いかかわしい店舗の前を、中高生も老夫婦も通り過ぎていく。しかしこれもまた、原宿表参道の奇妙な寛容さともいうべきだろうか。表参道では異色の様相をもつ建物でありながら、この交差点の角のスペースにしっかり収まっている(資料2-9)。

横断歩道を渡ると保育園の子どもたちと保育士さんの集団とすれ違った。思わず振り返ってその微笑ましい後ろ姿を見送る(資料2-10)。感度の高い人々がおしゃれをして颯爽と闊歩するまちでありながら、こうして散歩中の保育園児たちやベビーカー連れのお母さん達が自然に溶け込めるとはつくづく不思議なまちだと感じながら、目的地へと急ぐ。



資料3-9 神宮前交差点の突飛な店舗(筆者撮影)



資料3-10 保育園児と保育士の一団(筆者撮影)

◆原宿表参道住民E(39歳・男性)

JR原宿駅を出て、自宅へ向かう。半日有給消化で午後は休みのため、嬉しい帰宅である。普段夜遅く帰る時の表参道は店舗から漏れる光に照らされたケヤキがなんともよい雰囲気醸し出しているのだが、明るい光のもと帰路の歩みを進めるのも悪くない。

生まれも育ちも原宿だと言うと大抵羨ましがられる。スーパーもチェーンのドラッグストアもゲーセンもないから不便な面もあるのだが。母は事あるごとに、裏原族が一時期いかに迷惑な存在だったかを熱弁する。自分も既に高校生だったために覚えているが、確かに1990年代頃の裏原宿は常にかやがやしていた。住宅地に若い来街者が押し寄せたことで、マナー違反や治安の悪化が問題となったのだった。今だからこそ言えるが、10代の男子学生であった自分からすれば「キレイの」服に身を包んだ人々の姿は非常に眩しくも見えたものだった。昨今は若者が大人しくなったと言われているようだが、言われてみれば確かにそのような気もする。それでも原宿のまちを歩く若者の姿は、なかなかよいものだ。いわゆる「スーツを着ない仕事」に就いている者が多いのも、このまちの面白いところだろうか。自分自身はごく普通のルートを選び、レールにのって学校を卒業しサラリーマンになっただけに、夢を追って東京に、このまちに一人で出てきた若者と今この瞬間にもすれ違っているとすれば、なんだかこそばゆい気持ちにもなる。とはいえ、なかには何を目的に佇んでいるのかわからない若者も少なからずいる。ケヤキ並木のプラスバンドに腰掛けて言葉を交わしたり、頭を落として居眠りをしていたり…平日のこの時間にもこんなに多くの若者がいるとは思っていなかった(資料3-11)。



資料3-11 ブラスバンドに腰掛ける若者達(筆者撮影)

道を歩きながら、ガラス越しに京橋千疋屋のお店の中をちらりと覗く。愛着のあるお店であり、だからこそ高校生の頃に背伸びをしてデートに使った思い出もある場所だが、この時間帯はいつにも増して女性客の姿が目立ち、お茶を楽しむ人々で既に埋めつくされているようだ。お店に入るのはまた今度にしよと思いながら前を通り過ぎる。

陽光に包まれる神宮前交差点に着く(資料3-12)。写真を撮る人、ファッション関連と思われる取材をする人、待ち合わせをする人…と賑わっている。人の数は多いが、ここには渋谷や新宿とは少し異なる、どこかのんびりした雰囲気を感じるのは自分だけであろうか。ガードレールに無造作にくくりつけられた自転車までもおしゃれなのがこのまちらしいかと、柄にもなく少し誇らしく感じる(資料3-13)。信号が変わったので横断歩道を渡り始めると、信号待ちをする保育士と幼児達の姿が目に入る。その幸せそうな光景に促されるように、このまちで子育てをする自分の姿を試しにイメージしてみながら家路を急いだ。



資料3-12 神宮前交差点(筆者撮影)



資料3-13 交差点近くの自転車(筆者撮影)

4章 原宿・表参道の解体

4-1. 原宿表参道を形成する3大要素

4章では前章を受け、原宿表参道を構成する多様な要素をそれぞれの性質に応じて「恒常性」、「牽引性」、「突発性」の3つに分類し、年表とその流れの説明を重ねることで、まちの解体を試みたい。多数の要素からなる原宿表参道を分類し仕分けるのは至難の業である。また、知覚し経験する人の立場や背景によってもその線引きは異なるであろう。どのような基準で選別を行ったとしてもそういった恣意性は免れ得ないが、ここではまち全体の動静に対して果たしている役割という「3大性質」の観点で各要素を分け、5章へと続く概念を提示したい。3大性質はそれぞれ、以下の性質の違いから区別する。

・恒常性

…原宿表参道を支える土台となっている要素。時の経過につれ当然各々にも変化は訪れるが、長い目で見ると一定のイメージを醸成する要因として在り続けている。まちをぐんぐん前へと進ませる牽引性に対し、その独自性を揺るぎないものにすべく錨のように鎮座している。時代の大きなうねりの中で、今後も原宿表参道に在り続けていくであろうと考えられる、「静」のベクトル。

【表参道・櫛並木/明治神宮/明治天皇/風致地区・文教地区】

・牽引性

…変化のスピードが速く次々と真新しいものが登場する原宿表参道の先進的な一面を形成するもの。建物や通りのように有形のものから文化や雰囲気のような無形のものまでその形態は様々だが、そのどれもがまちを先へ先へと引っ張り「いつも新しい」「時代の先端をいく」といったイメージの醸成の源となっている。突発性よりも長いスパンでまちに影響を与える。「動」のベクトル。

【竹下通り/キャットストリート/若者文化/ラフォーレ原宿/セントラルアパート/連なるハイファッション店/商店街振興組合原宿表参道櫛会/魅力的な建物群】

・突発性

…恒常性と牽引性とで時を紡いでいく原宿表参道に明確な非日常性を差し込むもの。主にイベントやブームを指し、内外の人々の視線を惹き付け何らかのイメージを喚起する装置となる。日本全体に影響を与えた時代の転機もあれば、原宿表参道に限定して発生したものもあり、大小も様々である。「転」のベクトル。

【まちのイベント/1964年 東京オリンピック/バブルとその崩壊/スピリチュアルブーム—日本人の宗教観/行列のできる店の数々】

原宿表参道は元来何もない、静かなまちであったが、それでもかつての屋敷跡の影響で大きな区画をもっていたという下地はあった。そこに一大国家プロジェクトとして造られたのが明治神宮と表参道である。天皇崇拝、畏敬の念が強固であった大正・昭和初期において、「神域である」「門前町で

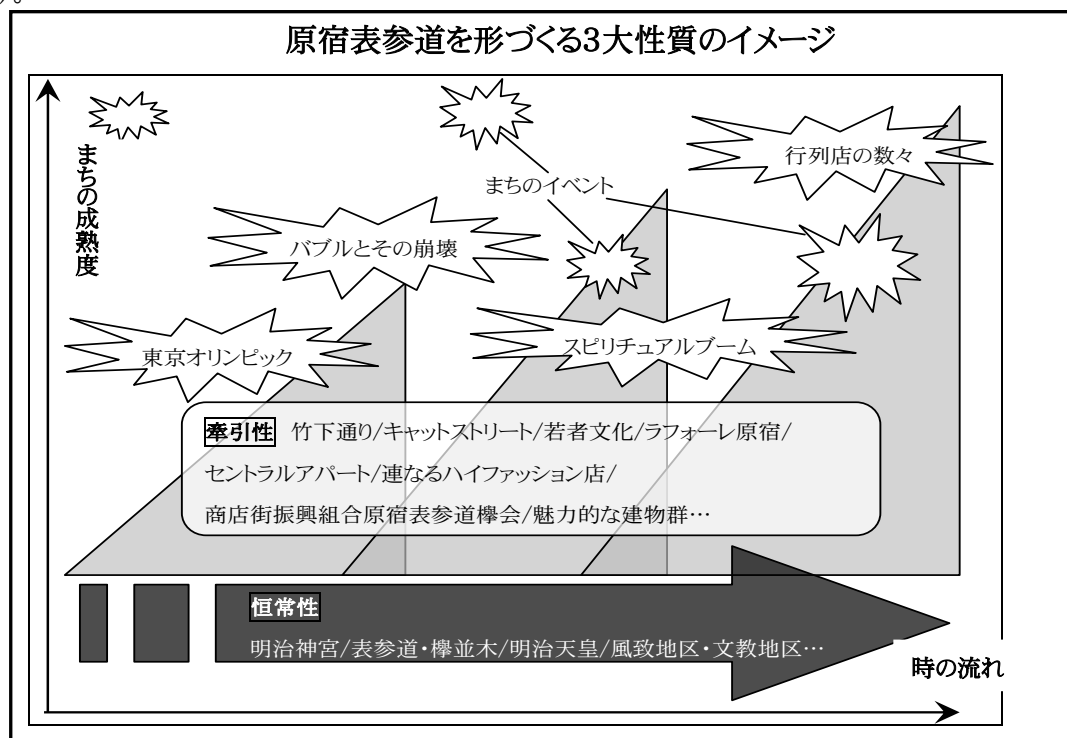
ある」といった意識はごく自然に人々に芽生えたのであろう。こういった原宿表参道の安定感、落ち着きのある趣きを生みだしている源こそが「恒常性」と呼ぶ要素の数々である。この恒常性という土台の上に、様々な時代の流れ、新しい要素の発露が生じているのだと考えられる。

戦後、外国文化の流入によってそれまでの和の雰囲気洋の明るさ、勢い加わることによって原宿表参道の独特なまちの風景が作られていく。その後、東京オリンピックの開催を経て流行や文化の発信地としての原宿の地位は確固としたものになっていく。そこで力を発揮したのが、「牽引性」に分類される要素の数々であった。それまで誰もやっていなかったことや真新しいものがここで次々とうまれ、メディアによる拡散もあいまって人々の視線を大いに集めてきた。

脈々と続いていく日々の中に差し込まれ、刺激を与えるのがここで「突発性」と呼ぶ「出来事」である。その代表はやはり数々のイベントであるが、それらが大小を問わず人々を惹きつけるのは何故なのだろうか。サントリー不易流行研究所は以下のように整理する。

1. 祭典の華やかさ、すなわち「ハレの場」であるという祝祭性
2. 人間の好奇心を刺激する新奇性・先端性
3. 見せ物的楽しさを演出した娯楽性
4. その時その場でしか味わえない臨場感・生の感動というライブ性

テンポラリーなイベントであれ常設の施設・装置であれ、何らかの企みのもと用意されたイベント装置は人々に思い思いの時間を過ごす愉しさを立ち位置を自ら設定する自由を与える(1996:224-25)。



資料4-1 原宿表参道を形づくる3大性質のイメージ(筆者作成)

4-2. 歴史年表

1906年	国鉄(当時) (1)原宿駅 開業
1920年	(2)明治神宮 創建。併せて表参道が東南方面の参道として整備される
1926年	(3)表参道 両側が (4)風致地区 指定を受ける
1927年	(5)同潤会青山アパート 建設
1933年	渋谷区内各町に町内会設置
1934年	渋谷～新宿間の明治通り開通
1945年	終戦。ワシントン・ハイツ建設(現代々木公園)
1950年代	戦火で焼けた明治通りから青山にかけての表参道に櫨が再び植えられる
1950年	キディランド開店
1957年	原宿が (4)文教地区 指定を受ける
1958年	明治神宮社殿復興。 (6)セントラルアパート 完成。
1960年代	「原宿族」の登場。ベトナム戦争を受け反戦をうたう (7)若者 、ヒッピーが流入。
1963年	ワシントンハイツ返還
1964年	(8)東京オリンピック 開催。ワシントン・ハイツが選手村として利用される。
1967年	代々木公園開園。渋谷川暗渠化。
1972年	東京メトロ千代田線明治神宮前駅開業
1973年	「 (9)原宿シャンゼリゼ会 」発足。神宮前地区、第二種住居専用地区指定を受ける。
1974年	(10)竹下通り 元年。表参道中央分離帯設置。
1978年	(11)ラフォーレ原宿 オープン ⇒D.C(Designers‘ characters’)ブランドブーム
1980年代	「竹の子族」が注目を集める。「原宿音楽祭」が行われる。
1990年代	「 (12)裏原宿 」の興隆。地元住民とのトラブル多発
91～98年	ケヤキ並木のクリスマスイルミネーション
1993年	明治神宮神楽殿竣工。再完成。
1996年	渋谷区基本構想策定
1998年	歩行者天国の廃止
1999年	山本正旺氏が商店街振興組合理事長就任。「原宿表参道櫨会」へ改名 「原宿表参道憲章」がうまれる
2000年	渋谷区都市計画マスタープラン策定
2000年代	裏原宿に集う若者と住民との関係改善の兆しへ(町内会との連携など)
2001年	(13)明治神宮奉納祭「原宿表参道元氣祭」 スーパーよさこい初実施
2006年	クールアジア 2006(表参道ヒルズにて環境省と協働で開催)
2010年	「清正の井戸」 (14)スピリチュアルブーム 起こる
2011年	表参道櫨並木植え替えの実施計画開始
2012年	神宮前地区まちづくり指針策定

各要素の経緯

(1)JR原宿駅

1906年、JR(当時国鉄)原宿駅が開業した。当時の駅舎位置は現在閉鎖中の北口から300メートル程離れていたが、1920年の明治神宮鎮座に伴う駅周辺の発展を受けて1924年、現在地に竣工した。なお、その跡地には翌年宮廷ホームが造られ現在も残っている。イギリス調のハーフティンバー様式の木造建築であるこの駅は、1955年国鉄によって保存駅の指定を受けた。現在表参道口、竹下通り口の2つの改札口を有しており、朝晩を問わず老若男女で大変混雑している。

(2)明治神宮

若者のまちとして独特の雰囲気や纏い、現在も絶えざる変貌を見せている原宿表参道の数々のルーツのなかで、並々ならぬ存在感を放っているのが明治神宮である。その歴史ははるか100年前にまで遡り、明治天皇と昭憲皇太后の崩御を受けて大正9年に造られてからというもの、時代の変遷を見守り続けてきた。現在も初詣の参拝者数は例年日本一を誇り、三が日には300万人以上が訪れる日本随一の神社として老若男女から支持を集めている。

明治神宮造営経緯

明治天皇と昭憲皇太后を御祭神として渋谷区代々木神園町1番1号に造営された明治神宮は大正9(1920)年11月1日、鎮座式を迎えた。当時の様子を知らせる新聞記事によれば、この日だけでも全国から約50万人の参拝があり、表参道・北参道・西参道といずれも「鈴生る群衆」で大変な賑わいであったという。

8年前の明治45(1912)年、皇居前広場で祈りを捧げる人々の想いも虚しく明治天皇の崩御が伝えられた。鉄道の枕木に身を横たえ、御陵を東京にと御料車の京都行きを止めようとする者も現れたが、伏見桃山陵への埋葬は天皇自らの思召しであったため、御神霊をお祀りする神宮創建の請願が全国各所から提出されるようになる。なかでも東京市民の動きは大きく、大正元(1912)年8月1日即ち崩御の翌々日には、在京の有志が東京商業会議所で協議会を開いた。神社は国家の宗祀とされ内務省の管轄下にあった戦前において、国費によって内苑が造られようとも広く国民の献費を募り、来るべき明治神宮に外苑を奉納しようという旨が覚書にされている。

近代屈指の実業家・渋澤栄一氏、東京市長・阪谷芳郎氏、東京商業会議所会頭・中野武宮氏らにリードされたこの請願運動に後押しをされ、大正2(1913)年、政府は直ちに神宮創建の準備に着手。大正3(1914)年に昭憲皇太后が崩御されるや合祀のことが確定され、大正4年5月、明治神宮造営決定が内務省告示より発表になった(今泉,2008)。

明治神宮の「森・杜」

一般に、神社には境内林や鎮守の森が当然のごとく併置されているが、そもそも古くは社殿というような建築物がなく、神霊としての動物や植物、神社としての森そのものを御神体としたという。『万葉集』では「神社」を「モリ」と読ませており、社と杜とは同義、神社とはすなわち森であったと考えら

れる。明治神宮の造営が決定した時にも、その候補地を選定する上でもっとも重要な条件の一つとされたのは、森が存在するか、神巖な森をつくることが可能かどうかということであった(内山・蓑茂)。

明治神宮の神域は面積にして約22万坪(73ヘクタール)にも及ぶ広大な土地であり、大きく3つの区域に分けられる。南部の旧御苑を中心とする区域(四季折々に自然をたのしめる庭園)、本殿をとりまく中央部(大正末期に植栽されたシイ、カシ、クスなどの常緑広葉樹からなるうっそうたる森林地域)、北西部の宝物殿を中心とする区域(明るい芝生地に木立が点在する北歐的な庭園)である。3つの区域全体を通して境内は森の様相を呈しているが、造成以前の境内予定地はまったくの原野であった。神宮の樹木約10万6000本のうち約10万本が造営にあたって新たに植栽されたものであり、明治の末に欧米から輸入された近代造園技術が明治神宮の造営工事で具現化されたということができる(相川・布施,1981)。

明治神宮は1920年に創建され、多くの人々に愛されたが戦時中、1945年の空襲で建物のほとんどが焼失してしまった。1958年に現在の社殿が復興し、1993年の神楽殿竣工によりようやく再完成に至った。神宮の森には、北は樺太、南は台湾、満洲や朝鮮から献木された常緑種を中心とする木々、当時365種9万5559本(現在は247種約17万本)が植えられた。その植栽には村々や町々が推薦し、造営局が審査をして選ばれた全国の優良青年たちが選ばれて、奉仕をした。第一次世界大戦による物価の高騰を受けて建設費用が賄えなくなり、経費削減のために青年たちへの奉仕募集が為されたとも言われているが、希望者が多かったため1人10日間から15日間にわたって延べ1万2千人ほどが交代で作業にあたった(内山・蓑茂,1981)。

戦後の明治神宮

明治神宮も去る第二次世界大戦の戦禍は免れえず、その社殿は1945年、1330発もの焼夷弾が降り注いだ空襲によって、神職、守衛、林苑技師をはじめ、消防隊、軍隊、地元警防団など、馳せ参じた人々による必死の消火活動も虚しく焼け落ちた。かろうじて両祭神の御霊を宿す御神体みたましろ御霊代一を宝物殿へと一時避難させた後、宝庫へと奉還し、終戦後の昭和21年、焼け跡につくられたささやかな仮社殿に奉安されるに至った。

現在も残る、注連縄が張り巡らされた夫婦の楠の大木はその際に奇跡的に生き残ったものである。また、渋谷中が火の海となったこの空襲時、明治神宮の森は大勢の人々の避難場所ともなった。針葉樹は脂分が多く焼けやすいが、神宮は広葉樹林であったことが幸いしたといわれている。どちらも明治神宮が人々と共に時代を経験してきたことを示すエピソードである(今泉,2008)。

戦後は米軍駐留により鳥居の前にもアメリカ兵が立ち、参拝もままならぬ状況が続いた。この頃、戦争で深く傷ついた神宮と人々とは互いにその日1日を生きるのに精一杯ではありながらも、その仮社殿には浄財を持ち寄る人、神前に捧げる野菜を届ける人、力になろうと駆け付ける宮大工等の姿が絶えず、神宮復興を目指して発足した復興奉賛会も戦後の混乱のなか神宮を支え続けた。

神宮本殿は1953年、遅れていた伊勢神宮の遷宮が無事に終了したのち1958年によりやく復興を果たした。一宗教法人としての再スタートを切り、青山、稲田、鳩森等周辺の氏神を中心とした氏子組織である崇敬会渋谷支部が発足した後はその繋がりを深めていく。



資料4-1 1954年元旦の明治神宮。仮社殿であっても変わらぬ賑わい(榊会資料)

近年の神宮

(以下の内容は、主に明治神宮神職である江馬氏へのヒアリング結果を基にしている。)

近年、明治神宮の参拝者数は例年横ばいの状況だが、1月は来宮者が分散するようになってきたという。三が日は町中の店が閉まり、当然のように大勢の人々が神宮を目指して初詣に出掛けていた時代と比べ、新年初めての土日に訪れる等その日取りが分散するようになってきた。

ネット文化の浸透によるものか、若い参拝者達もお辞儀や参拝方法など様々な作法をよく学んでから訪れるようになっており、観光目的での来宮から敬意を抱いての来宮への移行を神宮としては大変ありがたく感じている。

人生の節目を重要視する神宮では、多くの人々にその節目の日を過ごす場を提供したいと考えている。実際に、30代女性の厄払い希望は近年増えてきている。そのほか、外国人参拝者の数も増えており、以前から多かった中国・韓国からの観光客に加え東南アジアの人々の姿が目立つようになり、震災後に急減した外国人参拝者数ももちなおしている。

特に現在の原宿・表参道興隆の萌芽に寄与してきた中高年以上の世代の人々がまちの源泉やアイデンティティーを語る際、明治神宮の存在は欠かせないものであるようだ。しかしその意識、畏敬の念といったものは今の若い世代にどれほど継承されているのであろうか。価値観の多様化や情報流通の拡大を受けて、明治神宮が原宿・表参道というまちに与える影響力には少なからぬ変化が見られると考えられる(江馬氏談)。

今後の神宮

神宮は、自らその外へ出ていくことはしない。あくまでも地鎮祭などは各々地元の氏神様にお願いして欲しい、地元の氏神様を尊重したいとの思いから、沢山の依頼話が舞い込んできても一貫し

て線引きを行い、あくまで七五三や結婚等、外から中に入ってくる方々のみにとどめている。神宮は氏子のいない崇敬神社である以上、一步引いて適当な距離を保つことで、地元の氏子組織と有効な関係でありたいと考えており、周辺の氏神様との共存共栄を目指しているのだという。

また、まちとの関係性は現在一番よい状態を保っていると捉えている。かつて、御皇室の神宮参拝は警備面から裏道からが通例であったが、まちの人々を中心とする民意が届き、本来の流れ通り表参道を通して参拝していただけるようになった、それからというもの、御参拝の度に町会や商店会が提灯を飾ったり沿道に集まったりとあたたかく迎え入れてくれている。

まちとの関わりにおいては協力できる部分には営利目的の催しは好ましくないため、申し出があった際にはその主旨を確認するほか近隣への迷惑の可能性を検討する等、配慮を怠らない。また、櫛会のように規模が大きく目立つ商工会との関係性が突出しすぎないように調整し、まちの会とは極力公平に接するようにしている。

明治神宮は、今を生きる人々の天皇への意識とは一線を画す程の当時の熱意をもって造られた。崇敬の念というものには確かに弱まってきた面があるかもしれないが、「よくわからないが神様がいる、だからきちんと作法を守る」という意識をもってくれるのはよいことだと考えている。天皇への想いにこだわりすぎず、むしろ信仰の対象としての神社となっていけるよう尽力している(江馬氏談)。

(3)表参道・櫛並木



資料4-2 昭和28年の表参道。植えられたばかりの櫛並木(櫛会資料)

表参道完成経緯

表参道は1920年の明治神宮創建と併せて、東南方面の参道、内苑に至る表玄関として東京市によって整備された。全長は、原宿駅に隣接する明治神宮南参道広場から青山通りとの交差点(青山六丁目)に至るまでの直線1040メートル、幅約40メートルで、当時から電線は地中化されている。

夏至の日の正午に太陽が真上にくるように設計されているため、明るい日差しが街を包み込む。整備当時、まだ車道は砂利道だったが歩道には砂利とコンクリート基礎の上にアスファルト舗装が施

され、歩道には並木として目通り40センチメートルのケヤキ201本が植栽された。その光景は都内有数の優れたものだったが、その半分以上が第二次世界大戦で焼失し、戦後全国から約2万人のボランティアが集まって、2年をかけてあらためて植えなおされた。車道中央の分離帯にも植樹がなされ、欒並木のそれぞれの根元は植樹帯で結ばれアイビーがびっしり植えこまれる等、その管理は徹底して行われている。160本の欒と5本のいちょうが作り出す美しい並木は表参道の象徴として今も人々から愛され続けており、1991年から1998年まで続いた欒並木のクリスマスイルミネーションは、東京の新名所として一世を風靡した。

なぜ欒なのか

欒は落葉樹であるため、秋には葉が落ちる。その規模ゆえ掃除が非常に大変で商店街振興組合会費からの出費を増やす一因となっているが、そこまでして守り続けるのは四季折々で表情を変える点を重要視しているからである。無常を教えると共に、変化を恐れず、変化を拒まず発展していきたいという願いが込められている。

表参道に目をとめた世界の名だたるスーパーブランドは、いつでも撤退できる腰掛け的な借り店舗出店と異なり、土地まで買って進出している。山本氏によれば、出店のあいさつに訪ねてきたときにその理由を聞くと必ず、明治神宮と表参道の話が出る。パリにもニューヨークにもない環境だ、ここだからこういう文化に出会えるんだと答えるという。ビジネスの観点からみれば、なにも明治神宮がなくとも通りが栄えればよいという考えもある。しかし欒会としては、明治神宮と一体になって街が発展してもらえれば、そこに社会性というものが大いに高まっていくのではないかと考えている（月刊「環境ビジネス」編集部,2004）。

表参道を支える欒並木

20世紀に入り建築は、素材や様式につきまとっていた限界、それにより街並みの横の連続性が整えられる“横の呪縛”から解き放たれた。その結果、都市的建築には縦に伸びる自由が保障され、高容積の追求に資本がつきこまれるようになった。上方向への自由を手にするのと引き換えに古典的な横の建築の視覚的秩序が失われることで、街路に横の関係性を与えるものが道路や電柱、下水道等の土木的なインフラの他には無くなっていく。

街路の両側が統一的にデザインされた連続的で質の高い街路空間の日本における数少ない例として挙げられうるのが、集合住宅や店舗、オフィスを絶妙に配置し統合性をもたせた代官山ヒルサイドテラスや、立ち並ぶ建築の差異を見事な街路樹が覆い隠す表参道といった場所だという（都市新基盤整備研究会,2003,p116-117）。建設に際しての高さ制限やイメージ遵守を望む地域の声がありながらも多数の店舗や建築物が強い勢いで押し寄せる表参道において、その全体的な調和保持の一助となっているのが欒並木なのである。なお、千代田線開通の際に表参道地下はコンクリートでその側面を遮断されたため欒はその根を参道側には伸ばせなくなっており、いずれは大々的な工事によってその壁を外してあげねばならないという計画も持ち上がっている。

(4)風致地区/文教地区

「歴史の中で、だれもが語っていることですが、原宿というのは、明治神宮あつての街なんです。明治神宮というのが、街の景観を守る存在として、常にあつたわけです。警察も役所も、明治神宮の影響で非常にうるさかった。住民もうるさいんです。なにしろ、神域ですから。青山通りの表参道の入り口に、大きな灯ろうがあるでしょう。昔はあそこから拝む人がいたくらい、権威があつたんですよ。

去年の暮れ、竹下通りでピンクビラを配っている男がいましたね。渋谷の道玄坂のホテルのですよ。住民から『低俗ビラ配っている』と町会長のところに連絡がいきまして、すぐに男を追い出したんですよ。それだけじゃなくて、翌日『ピンクビラに注意』というポスターをつくって、各町会に回したんですよ。それくらい、住民がうるさいところですよ。明治神宮に加えて、原宿は文教地区に指定されていますから。とにかく、エロス性、ギャンブル性が欠落している街なんです。」(加藤,1986:34-35)

上に引用した『原宿物語』(加藤,1986)のなかで、長年原宿にて人気飲食店を経営する男性が語っているように、原宿にはゲームセンターも、パチンコ店も、風俗営業の店もない。これが、地方からの修学旅行生も安心して遊べる所以でもある。このような街づくりの基盤となっているのが、原宿全体に敷かれている「風致地区」「文教地区」の指定である。表参道両側の奥行10間の区域が、都市の自然美を守るために制定されている「風致地区」に指定されたのは、明治神宮鎮座6年後の1926年である。

また「文教地区」とは、教育施設が多く集まり、歓楽的な施設などの設置が許されない地域を指すが、原宿がこの指定を受けたのは1957年のことだった。当時、千駄ヶ谷小学校のそばに連れ込みホテルが林立し、原宿駅前にもあつた同様の旅館を含めて、これらを一掃しようとする運動が起こった。この渦中にいたのが、「子供のための環境づくりを」と立ち上がった千駄ヶ谷小、鳩森小、神宮前小のPTAと、その運動を支援する神宮前三丁目界限の人々である。こうした住民運動によって、原宿・代々木・千駄ヶ谷の3地区は、今なお「文教地区」という印籠のもと、歓楽街化の危険から守られている(半田,1994:42)。

(5)同潤会青山アパート

関東大震災による被災者救済・住宅供給のため、財団法人同潤会が世界中から集めた義捐金によって1927年に表参道に建設した協同住宅(アパート)。10棟すべてが鉄筋コンクリート3階建てとなっている洋風建築で、全部で138戸となっていた。当時は観光バスの周遊ルートのひとつになるなど東京名所として人々の羨望の眼差しの的となった。のちに小規模のアトリエやファッション関係の店が入居し住居以外の使い方もされるようになっていった。

2000年代に突入し建物の経年劣化が懸念されるなかで同潤会青山アパートの取り壊しと再開発が計画された。主導は森ビルで、設計は安藤忠雄が担当した大規模なプロジェクトであるが、表参道の傾斜やケヤキ並木との調和が念頭におかれ、計画は慎重に進められた。2006年にオープンした「表参道ヒルズ」は地上6階地下6階の施設となっており、地下3階から地上3階を占める商業部分と地上4階以上の住宅施設、および駐車場からなる複合施設として誕生した。商業部分には国

内外の有名ブランドが入居するなど「大人」、「ラグジュアリーな空間」を実現しており、スパイラルスロープと名づけられた斜路によって、全ての通路空間を一筆書きに巡ることができるという斬新な店内配置も話題を集めた。

(6) セントラルアパート

表参道と明治通りの交差点にあった地上7階、地下一階の大きな建物。1958年竣工、1996年に解体された。写真家やデザイナー、編集者らが事務所を構えるなど、同潤会アパートと並んでクリエイターの本拠地だった。周りにはマンションメーカーと呼ばれた、服飾デザイナーの小さなオフィスも多かった。60～70年代、原宿の中心として、若者文化の流行を生み出した。跡地には現在、Gapが入居するファッションビル「t's harajuku」が建っている。

『表参道』と『明治通り』の交差点に位置する原宿セントラルアパートは、60～70年代のヤング・カルチャーを語るのに、欠かせない建物である。1958年の完成当時は、駐留軍関係を含む特別な人々の住居用アパートだったが、昭和30年代後半からは上に事務所、下にショップが入るといった形がとられるようになった。それにともない、アパートにはカメラマン、デザイナー、コピーライター、イラストレーターといった、新しい文化の担い手となるクリエイターたちが続々と入居していく。当時セントラルアパートに集っていたのは浅井慎平、糸井重里、渥美清、細野晴臣といったそうそうたる顔触れで、ここに事務所を構えるのが文化人のステイタスになっていった。マンションという環境が生み出す密着性や、中心部の吹き抜け部分をもたらす共同性も差別化の後押しをした。



資料4-3 1960年神宮前交差点付近 後ろに見えるのがセントラルアパート(榎会資料)

セントラルアパートの正面入り口の左にはクレドール、右にはレオンという喫茶店があった。スタイリ

ストの草分け的存在として知られる高橋靖子は次のように述べる。「新宿の風月堂がそうであったように、そこに出入りする人たちが、その時代、その文化、その店をつくったのだ。レオンはその典型といえる喫茶店だった。セントラルアパートには、デザイン制作会社やカメラマンの事務所が集中していた。外部の人との打ち合わせのあとのほっとしたひととき、朝のお茶や午後の和みのひとときなど、私たちは一日中、レオンを出たり入ったりした。」(高橋,2012,p47-48) 喫茶店「レオン」はマスコミ関係者ご用達になり、共同ミーティングスペースとしての役割を果たした。当時竹下通りはまだ原宿のはずれであったが、その一方で『原宿族』と呼ばれるオシャレな若者が集っていたこの境界のスナップ写真は、ファッション誌を賑わせた(半田,1994:50)。

(7) 若者文化

いつの時代も、原宿の成長の先陣を切ってきたのは若者達とその文化である。例えば1980年から14年間続いた新人を発掘するオーディション、「原宿音楽祭」は何人ものミュージシャンを発掘。尾崎豊、久保田利伸、小林武史などがデビューしたほか、後に併設した「ミス原宿」は女優の深津絵里、タレントの森口博子を輩出した。キャッチコピーは「成り上がれ若者」。



資料4-4 キディランドの向かいで行われた音楽祭(榎会資料)

文化変遷

若者文化の情報発信基地として、原宿が発展し始めたのは1960年代であった。車を乗り回す「原宿族」が出現し、50年代の太陽族を意識したアロハシャツにサングラス、ジャズブームを反映したブーツなどがまちに溢れた。

70年代に入り「アンアン」「ノンノ」が相次いで創刊されると、フォークロア風ワンピースを着用した「アンノン族」が一世を風靡した。明治神宮が初めて参拝者数日本一を達成した79年には「竹の子族」がブレイクし、サテンのスーツ、ハーレムパンツなどの奇抜ファッションで話題を呼んだ。

それでは、1971年に実施された表参道の通行量調査の結果は1日わずか1200人。当時の原宿にはまだその程度の数の人しか歩いていなかった。新宿と渋谷にちょうど挟まれた谷間のような存在の街であり、当時は家賃も安かったため、若者たちがアパートを借りていろんなブティックを原宿に作った。セントラルアパートでは演劇人やデザイナーの卵たちが集まってパーティーが開かれていた。

今も語り継がれる「レオン」という喫茶店は朝7時にオープンし、皆がモーニングコーヒーを飲みながら新聞を読み、情報交換をする。これからの時代を導いていく若い人たちが集まる不思議な気風が漂っていたという。早朝は出勤前の人々、お昼から夜にかけては文化人やアーティストが訪れたこのカフェは、自然と時間帯の棲み分けがなされていた。



資料4-5 1974年、セントラルアパート喫茶レオン前(樺会資料)

着々とその密度を増していく原宿表参道にはアパレルの先駆者たちも集まり、六畳一間の部屋を借り、横山町から反物を仕入れて、夜を徹して作った洋服を午前中には表参道や竹下通りに出すといった生活を続けており、いわばアパレルの生鮮市場のようなものができていた。しかしバブルを経験して街が静まりかえったのち、少し復活してきた頃には若い人が入ってくるというよりも外資系ブランドが続々と進出したことで第二の外資系バブルのようになっていく。それでも彼らは職人的な部分(クラフトマンシップ)を持ちつづけ、アイデンティティーを失いやみくもに作るのではなく自分たちの個性、長所、世の中に求められているものをよく考え、知っていると言われた(月刊「環境ビジネス」編集部,2004)。

(8)1964年 東京オリンピック

原宿はかつて駅から一歩外に出ると厳かな雰囲気漂い、有数の盛り場であった新宿・渋谷・池袋と比べてそこまで派手なまちではなかったという。そのような原宿が一気に有数のまちへと駆け上がっていった契機が、1964年の東京オリンピック開催に伴う開発である。

1959～1962年には青山通り、代々木第二体育館、コープオリンピア…と建設ラッシュが続き、急激な発展・再開発が進んだ。オリンピック開催は、当時の人々にとって敗戦国がここまで来たのかと、夢のような大イベントとしてその目に映ったという。そのインパクトは非常に大きく、灯る聖火を見て感動した記憶があるという(福士氏談)。

またオリンピック開催前後から、一町会のみならず街全体でのエリアマネジメントの機運が高まったことも注目すべき点であろう。オリンピックに際しての発展は、戦後一度にまちの雰囲気を呑みこん

でいったアメリカ文化に魅了され、気圧されてもいたであろう原宿表参道において真の復興を感じさせ、日本が自分達の手元に戻ってきた実感を与えたともいえる。

(9) 商店街振興組合原宿表参道櫛会

商店街振興組合原宿表参道櫛会(以下「櫛会」)は、1973年4月に表参道と神宮前交差点両側の明治通り沿いを区域とする「原宿シャンゼリゼ会」として設立し、1985年8月に商店街振興組合として法人化した。その後1999年9月、原宿の発祥の地に位置すること、歴史的に明治神宮の表参道であること、シンボルである櫛から「原宿表参道櫛会」と名称を変更した。原宿表参道地域の生活環境の向上と商業の健全なる発展を目指し、商店や企業、住民とが一体となって活動している(やまところ.jp トップインタビュー)。

原宿シャンゼリゼ会から「櫛会」へ

原宿シャンゼリゼ会は、誰もが知るパリの著名な並木道にあやかり付けられた名称であった。1999年、山本正旺氏が同会理事長に就任すると同時にその名は「原宿表参道櫛会」へと改められた。それは見本に据えた憧れの外国の背中を追いかけ、いつかは追い越したいと願っていた高度成長期の意識から、時代の変化を受け、今後は独自のオリジナリティを追求していこうという意識への転換の表れである。会の舵取りを担い大きな足跡を残した山本氏(現名誉会長)はインタビュー内で次のように話す。

「国際化という流れは一度は通らなければならなかった。けれど、グローバル化への取り組みばかり突出して、日本の思想、文化といったオリジナリティは否定されてきた。ローカリゼーションをもっと高めていく必要を感じたんです。本来、ここは明治神宮の表参道なのだから」(原宿表参道オフィシャルナビ 山本正旺氏インタビュー)

山本氏という原宿表参道のキーパーソンが理事長に就任し、新たなスタートをきった櫛会はこれまでの方針からの卒業を体現するかのように1998年の実施をもって、一度表参道のイルミネーションを中止。翌年は日章旗と提灯を櫛に飾ったという、それは集客効果を目指し行われてきた様々な取り組みが、無意識のうちに時流に乗るようになってきていたことへの反省でもあった(月刊「環境ビジネス」編集部,2004)。また、ローカリゼーション向上を目指し同1999年に「原宿表参道憲章」、2001年には「原宿表参道 eco-avenue21宣言」を打ち出す。

原宿表参道憲章

- 1 友情と愛と元氣のある街
- 2 自然と環境を大切にする街
- 3 芸術と文化を発信する街
- 4 歴史と科学をみつめる街
- 5 平和と未来と幸福を創る町

原宿表参道 eco-avenue 宣言

- 1 太陽光や風力など、クリーン・エネルギーの活用
- 2 生ごみ・ゼロ・エミッションの促進
- 3 バリア・フリー化の推奨
- 4 ボランティア活動の促進

(Harajuku Super Station より引用)

櫛会と他の商店会、町会との関係

原宿表参道に存在する商店会には町会とほぼ同一組織として両方の機能を兼ねているものが多い。竹下通り商店会/町会、穂田商店会/町会、神宮前二丁目商店会/町会、原宿神宮前商店会/原宿九重町会といったかたちである。そのようななかで櫛会は今や大型店を含む約800店舗によって構成され、6町会を跨ぐ規模となっている。そのためイベントや取り組みにおいても櫛会ばかりが益を受けるのではないかと、外部の人間ばかりではないかといった不安や反発が見られることもあった。表参道イルミネーションに関しても、マスコミに反対派の声を大きく押し出され、不仲説が囁かれることもあった。しかし実際まちの大半の人々にとってはある種の自慢であり、期間中に町会持ち回りで行われた点灯後1時間の清掃活動では法被を着て通りを一周し、訪れる人に話し掛けられたり質問を受けたりすることを楽しんでいる様子が見られたようである。

櫛会であるからこそできること

櫛会に求められている役割は、年約1000万円の予算を割くことのできる清掃費を活用して、継続的な清掃活動、啓発活動を行っていくこと、月2万円という割高な会費に見合う効果を発揮すること、幾つものまちづくり関連賞受賞歴があることが示す高い注目度や外部評価、ルール作りにも提言を行うといった行政との連携など、その規模の大きさを生かして継続的な地域価値を重視することにある。明治神宮との関係においても、町会と比べて入れ替わりの激しい商店会を幾つも有する原宿表参道にあって、設立時から一貫して他の会をとりまとめ一体感をもって神宮との関係を築いてきている櫛会の存在はありがたいと、神宮神職の江馬氏は語っていた。インバウンドに日本一取り組んでいるという自負がある一方で美化運動やパトロールに大変力を入れていることに見受けられるように、商店会ではあるが最も重要な姿勢は営利目的よりも地域還元におかれている。まちとの連携とバランスを保つための努力が続けられているといえよう。

また、まち全体としては2002年のまちづくり協議会設立により町会・商店会の連合体が成立し、より強い協調性をもって共に歩んでいくこととなった。そのほか、大店法成立に際して生まれた9つの商店会による原宿商店会連合組合は、その運営に一時混乱が生じるも立て直し、まちの問題に団結して取り組む組織となっている。

(10) 竹下通り

JR原宿駅竹下口の目の前から明治通りまでの全長約350メートルに及ぶ商店通り。毎日午前11時から午後6時まで歩行者天国となる。主に女子中高生をターゲットにした小規模な店が集まっており、日本の「カワイイ」文化を象徴するファッションストリートとして外国人観光客にも人気がある。

初期の竹下通り



資料4-6 1955年頃の竹下通り(樺会資料)

戦前は人通りが少なく狐や狸が出ることもあるほど静かな場所であり、「追いはぎが出るから女子どもは日没後に歩いてはならない」と言われる程であった。オリンピック開催後、JR原宿駅の竹下口が開かれてからようやく、当時表参道より地価が安かったために徐々に人が集まるようになった。パレフランスがオープンした1974年が竹下通り元年とされており、1970年代半ばには竹の子族を筆頭とする若者の流入がみられた。

竹下通りの賑わいの起源は現在の「Gap フラッグシップ原宿」、「ソラド原宿」辺りにあったテント村である。家賃は日払い制で規則も殆どなく、誰でも商売ができる空間であったため商売を始めたい若者や駆け出しの人が集まっていった。のちにテント村がなくなり彼らが竹下通りに流れ込んでいったことも、所狭しと小さい店が並ぶ竹下通りの風景をつくる一要因となった。

1980年代初頭にはD.C.ブランドブーム³到来によりメンズ・ウィメンズ双方のショップが人気を集め、高価格帯商品にも関わらず盛況する。このブームに翳りが見え始めると、入れ替わるかのようにタレントショップ⁴が急激に増え始めた。タレントにとっても竹下通りでお店を出して成功を収めてから他地

³ デザイナーがブランドのイメージ作り、企画、製造から販売を一貫して行う形態。ポストモダンを背景とする差異化への希求が後押しした。D.Cブランドショップの販売員は「ハウスマヌカン」と呼ばれ、一時期人気職種となった。

⁴ TVなどの媒体で活躍するアイドルや歌手・俳優などが、自身の似顔絵やロゴマークを用いたグッズを専門に販売する店(Wikipedia「タレントショップ」より引用)

域にも拡げていくことがステータスのひとつとなっていた。最盛期には50～60もの店舗数を誇り、週末には満員電車並みの混雑ぶりをみせたという。その一方で、タレント村ブームを受けて雰囲気を変えた竹下通りからは大学生たちが姿を消し、彼らはその足を表参道へと向けたのだった。

バブル崩壊とターゲット層の固定化

竹下通りの構成が次にガラリと変わった契機はバブル崩壊であった。手持ち物件を担保に次の土地を取得する所謂「土地転がし」が横行していたが、バブル崩壊によってドミノ倒しに崩れていき地上げによって3分の2以上の所有者が去っていった。大規模開発をしようと点々と入手が進められていた土地が放置され、中途半端に残されている様子も少なからずみられた。

経済的打撃は各店舗の取り扱い商品にも影響を及ぼし、D.C.ブランドはもとより、比較的価格の高いメンズ服が姿を消していった。タレントショップも激減するなかでそれらに代わって台頭してきたのが、安く量産できる若い女性(中高生)向けの服を売るお店や激安ショップ(別名「価格破壊店」)である。この辺りから、女子中高生を中心とする限定されたターゲットを狙った薄利多売式の店舗展開が定着していき、ファストファッションブーム到来時にもその進出を抵抗なく受け入れることとなった。

2000年代前半、大手ディベロッパーが目をつけたことでミニバブルが発生したがすぐに落ち着きを取り戻し、客層や販売物に大きな変化は起こらなかった。しかしそれでも相続税、固定資産税の率の高さがネックとなり、この地が住宅地だった頃からの土地所有者の転出が後を絶たない状況が続いている。施設の老朽化も手伝って新入居者による建て替えの進行のほか、2020年の東京オリンピック開催に向け、地価高騰や土地所有者の入れ替わり等が予想される。

竹下通りに構築された外国人ネットワーク

竹下通りでいまや見慣れた光景となっている黒人の客引きは20年程前から既にある問題である。彼らは全店の1割程である約17～18店舗の店員達であり、日本人を妻にもっているために権利関係は問題がないことが多い。賃貸契約の際は妻が対応を引き受け、オープンして初めて運営に黒人が携わることが判明することも少なからずあり、また金銭的に余裕のある妻の実家から資金援助を受けているパターンもよく見受けられるという。彼らは共通語として英語を使い、商店会の人々とは日本語で話す、当然故郷の言葉もわかる、といったようにトリリンガルで、来日し、東京で逞しく生きているからには相応の高い能力を有している。

商店会としては穂田区民会館に彼等を集めて説明をしたり、秩序を守るため竹下ルール of 制定を行ったりと対策を打ってきたほか、警察にも再三相談に行っている。しかし都条例でないと罰則等は適用できないため区条例には強い行使力がなく、そもそも風俗店等には問題があるにしろ竹下通りのように洋服店で行われている勧誘に本来問題はない。問題視されやすいのは、竹下通りを訪れる中高生と、彼女達にとって見慣れない大きな体格、その風貌との掛け合わせに一因があるようである。実際に彼らはしつこくまとわりつくことはせず、話しかけられたことで怖くなりつい買ってしまったと警察に足を運ぶ中高生については「直接店に戻ってきてくれれば返品に応じるのに。」と嘆く姿が見られるという。その陰に隠れて日本人によるスカウト行為が増えていることもあり、商店

会には一貫した姿勢を見せ平等に対応していくことが求められているといえよう。

かつて竹下通りにいる黒人達の出身国はガーナが殆どだったが、近年はナイジェリアが加わり、数としては追い越している。在日アフリカ系ネットワークの拠点のひとつが竹下通りになっており、話を聞きつけて新たな参加者が訪ねてくることも多いという。商店会と良好な関係を築き挨拶をする仲になっている者が殆どだが、日本人を敵視する一部の黒人との板挟みになる様子も見られ、その関係構築は一筋縄にはいかない状況が長く続いている。レシートがなくどこの店舗で買ったかを証明できない、値段がドル表示されていて分からないといった来街者の声を受け、商店会として名前と所属店舗を記した名札を作成して着用を促したり、返品交換を受け付ける旨が書かれたポスターを配布して掲示を呼び掛けたりといった後押しをしてきたが、依然として消費者が弱い立場になりがちである。お客さんを怖がらせず、安心させることが必須であると呼びかけ続けているという。

商店会としては黒人達を排除するのではなく、ひとつの文化として昇華できないかと共生の道を探っている。ネットワークが構築され、黒人達がこれだけ集結しているのは大変珍しい光景なのだから、将来的にこの地でアフリカンフェスタを行っても良いと考えているが、そのためには互いの更なる歩み寄りが必要だとしている。来街者をこわがらせる客引きをやめない限りは会への加入許可は出せないとする商店会と、商いで生活していくためやむを得ずやっているのだという黒人達との一種の駆け引きの解消は容易ではない。彼らの中にも、何故なかなか表通りの1階にスペースを貸してもらえないのか、民族的な壁なのではないかといった不満はあり、日本人オーナーや土地所有者の意識改変を含め、改善すべき問題は山積している。

竹下通りの独自性

現在、竹下町会には95世帯程が所属しているが、子ども世代が出て行ったことで住人は減り、残っている住人には高齢者が多いという。商業面では、表通り1階に展開する店舗が安定した売り上げを保ちやすい一方で2階や裏にある店舗の入れ替わりの回転が速い。加えて、相続税の厳しさにより土地を手放す人が続出したことや、建物が次々と老朽化を迎えたことによる建て替えが次々と進み、まちの様相は急速に変わっていくことが予想される。

竹下通りはタレントショップブームや竹の子族の出現に見られるように、明確なイメージや「目玉・見どころ」を発信することで人々を引き寄せてきたといえる。特にバブル崩壊後は中高生というセグメント化された層をターゲットに、安さ、薄利多売を武器に闘ってきたこの通りでは、同じような人間が集まる場所に安心感が芽生え、その系統の店舗が増えるという循環が生じている。

絞りこまれた客層と固定化した雰囲気は通りを愛する人々に「こしかない」という認識を抱かせており、靴下や下着など、ひとつのアイテムが流行ると爆発的にそれを取り扱う店が増えるという。下火になると次のものへ、という波が次々と押し寄せる竹下通りには、競争の激しさにより売れる店しか残らない。その突出した変わり身の速さや来るたびに光景が変わるスピードの速さが活性化、切磋琢磨、流行先取に繋がっている。

(11) ラフォーレ原宿

森ビルが初めて手掛けたファッションビル。百数十店舗が小さなブースを設けて入居している。1978年、表参道と明治通りの交差点近くにオープンして以来、原宿の若者文化の情報基地として「原宿ブランド」を押し上げてきたランドマーク的存在である。

オープン当初はその5年前に開店した渋谷PARCOを意識して日本を代表するブランドを集めたが二番煎じで失敗に終わる。その後リニューアルし、原宿の元気で若いブランド主体に路線変更し、一気に人気が発火した。この背景にはちょうど第一次、第二次石油ショックの洗礼を浴びて、省エネという概念で大量生産が否定されたことがあり、原宿の手作り、多品種少量の作品が受けた(月刊「環境ビジネス」編集部,2004)。



資料4-7 クリスマス広告が掲げられたラフォーレ原宿(筆者撮影)

大手百貨店が進出していない原宿表参道において、ラフォーレ原宿は大々的に、そして明確に流行や宣伝を押し出すひとつの文化装置となっており、シーズン毎の印象的な広告や風船等を使用したモニュメントの数々など、通りを行く人々の感性を刺激し楽しませている。セール時期ともなると街中にはラフォーレ原宿のセール専用ショッピングバックを手にした若い女性の姿があふれるなど、その存在感は強い。神宮前交差点付近という好立地も手伝ってか、ラフォーレ原宿前にはガードレールに腰掛ける人や立ち止まって会話に興じている人の姿が多く見られる。ファッション面での牽引は勿論のこと、建物をもつシンボルとしての分かりやすさから原宿表参道の重要スポットとなっている。

(12) 裏原宿・キャットストリート

裏原宿とは表参道を挟んで両側に広がる服飾関連店の密集地のことで、特に原宿通りやキャットストリートを指すことが多い。1995年頃からストリート系の洋服、雑貨等を扱う店舗が集い始めた背景には音楽・文化業界の動きがあったようだ。1982年に日本初のクラブと言われるピテカントロブス・エレクトスができ、東京ブラボー、坂本龍一、高橋悠治等のライブが行われたり、キース・ヘリング、

デヴィッド・バーン等海外のアーティストが訪れたり日本ストリート・カウンターカルチャーに大きな影響を与えた。ファッション面でも、服飾デザイナー長尾智明や高橋盾らが中心となって生み出した「アンダーカバー」等数々のブランドの服が裏原宿に点々とオープンした店舗で販売され、ファッション誌、カルチャー誌で取り上げられるなど、他の追随を許さない注目の的となっていた。表参道の縮小版としての成長の道を辿るのではなく、全く異なる趣とつよみを持って歩み始めたことに裏原宿の独立性の鍵があったといえるであろう。

また裏原宿の大きな特徴として、各店舗のオーナーや店員同士がネットワークを構築していることが挙げられる。単なる競争関係ではなく、ファッションを共通コードとする一種のコミュニティが形成されたのだという。この界限にはファッションにとどまらず音楽、デザイン、出版、映像関係の企業も立地しており、その近接性が更に利点となる好循環が生まれている(増淵,2012,94-98)。

神宮前三～五丁目にかけて走る遊歩道が『キャットストリート(渋谷川遊歩道)』である。もとは渋谷川(稲田川)だったこの川筋は1967年に暗渠になった。江戸時代には米の賃つきを仕事とする水車家業の小屋が多数あり、綺麗な水が流れる渋谷川は鯉や鮒、ウナギなども取れるのどかな場所であったという。「渋谷川遊歩道」として生まれ変わってからは、植え込みや砂場、ジャングルジムなどの児童用遊具が設けられた。現在では昼休みに腰掛ける大人の姿や幼稚園帰りの幼児、母親達の姿が見られ、公園のような役割を果たしている(半田,1994:52)。

(13) 原宿表参道元氣祭スーパーよさこい

2001年に櫛会が中心となって立ち上げた、明治神宮の夏の奉納祭り。原宿表参道には、昔から続く伝統的な祭というものがなかった。何かできないだろうかと櫛会を中心に長年論議を重ねるなかで、櫛会メンバーに所縁のある高知県のよさこい祭への視察が実現した。そのパワーと盛り上がりを目にした櫛会理事会はぜひその力を原宿表参道にも持ち込みたいと考えた。明治神宮に対して元氣祭を一緒にやりたいと依頼した際、毛利義就権宮司の「魂を入れて差し上げましょう」という言葉から計画が始まり、ご神殿の前から始まる奉納祭にすることが叶った。明治神宮側も、地元の人々と一体となってお祭りをして、その存在を啓蒙していきたいと考えていたところだった。

踊り子たちは表参道、NHK前ケヤキ並木通り、明治神宮前をパレード(練り踊り)する。戦後生まれのよさこい祭りは今や全国に波及している(祭りの名前の冠に「よさこい」がついている祭りは全国で約220カ所)が、スーパーよさこいは首都圏で最大規模である。コンセプトは、よさこいを通して日本人のアイデンティティーを求め、日本人の元気を世界に発信すること。高知の良き伝統と、流行をリードする表参道の斬新さの融合が魅力。開催日は毎年八月最後の土日。来訪者は初回からいきなり100万人を突破した。

当時明石の祭で大事故が起きたことで敏感になっていた警察や消防は最初、観客がたくさん集まるイベントはやらないでほしい、というスタンスだった。しかし明治神宮の協力体制が後押しをし、原宿から呼びかけて日本中に元気になってほしいという思いを訴えた末、許可が下りた。

よさこいは、まちの潤滑油の役割も果たした。商店会と町内会はそれまで少なからず対立を経験してきたが、町会連合会の婦人たちが「よさこい連」を作って応援してくれたことなど、よさこいをきっかけに壁がとれ、商人と住人が一体化できた感触があった。ほかにも「江戸火消し隊」という消防署員と街の消防団の官民混成チームまで作って踊るなど、日頃うまく取れていなかったコミュニケーションが、一緒に練習をすることで打ち解け、とれるようになったという。

祭への理解と協力が目立っているのは住人達だけではない。2日間で延べ約100万人が詰めかけるこの祭りには、警備保障会社がボランティアで大量の警備員を派遣してくれたり、夏休みに帰省できなかった高知出身の学生たちが手伝ってくれたり、人の輪がずいぶん広がっている。元氣を呼び戻すのは、結局、誇りだとまちの人々は話す。地域がよくなって、その地域に誇りが持てれば、みな生き生きとしてくるのだという。よさこいを通じてまちとの接点を増やしたこの例のように、神社の活動も歴史や伝統、文化をどう発展させ、またどう継承していくかということに密接に関係する(月刊「環境ビジネス」編集部,2004)。

(14) 宗教観・スピリチュアルブーム

2010年、TV番組内で芸能人に紹介されたことを発端に、明治神宮内にある「清正の井戸」が「運氣のあがるパワースポット」として若い女性を中心に人気が急上昇し話題となった。一時期は5時間程の行列ができるほどの混雑となった井戸の前には2013年現在も警備員が常駐しており、手を浸したりスマートフォンで写真を撮ったりする人々の姿が見られる。携帯電話の待ち受け画面にすると運氣があがるという噂が広まったり、前の人に倣ってお札や携帯ストラップを洗う人が出てきたりと、ブームに乗じて様々な現象が起きるといふ大変な盛り上がりを見せた(glitty「パワースポット、清正の井戸」は誰が広めたのか)。

この急激な注目度上昇と若い人々の来宮に関して、明治神宮神職である江馬氏は「清正の井の人气については、勿論悪いことではないですがそこは本殿ではありません。あくまで参拝は本殿に行つて欲しいと考えていますが、スピリチュアルな感覚をもつ体験機会としての来宮、目に見えないものへの畏敬の念をもつきっかけとしての来宮は歓迎しています。」と話す。また、作家の姜尚中氏は原宿表参道について語る中で、若い人々と祭祀施設との関係について次のように述べている。

「最近ではスピリチュアルブームのようですね。雑誌で伊勢神宮の特集記事が組まれていたり、都心のお寺では写経や座禅がはやったりしています。以前より、若い人たちが神社仏閣に足を踏み入れる機会が増えたのではないのでしょうか。

そういう人たちはたぶん特別な信仰心を持っているわけではないと思います。お寺で仏教の教義を学ぶというより、お寺のお茶屋さんでひと息つく、宗教的な意味合いよりも、もっと日常と直結するような空間として考えていると思います。…(中略)…そこには「ゴッド」とか「宗教」といったものではなかなか救いあげられない、もっと日常的で切実な慰めや救済があるのではないのでしょうか。」(姜尚中,2011:33-34)

明治神宮に限らず、近年は「スピリチュアル」や「パワースポット」といった言葉が頻繁にメディアを飛び交っている。若い世代がこぞって押しかけ混雑している神社やモニュメントの様子はおなじみの

ものとなっており、なかにはそのブームを集客力や観光面での招致力の向上へと巧みに繋げることに成功した地方都市もある。そのような中で明治神宮(清正の井戸)は、原宿自体には足を運んでいるがその目的は専ら買い物であった若者達を惹きつけ新たな導線を描くことに成功したという点でこの地域に新しい可能性をもたらしたともいえる。

明治天皇

明治神宮は、熱心な市民の声の結晶として創設された。それほどまでに当時の人々に影響を与えた明治天皇の力の大きさの源はなにか。天皇崩御の前後の徳富蘆花の手記から、そのヒントを探りたい。以下、松本健一『明治天皇という人』を引用・参照しながら進めていく。

徳富蘆花は七月三十日、明治天皇の死が発表されると「みみずのたはこと」に日記体で次のように書き、呆然自失の思いとともに、天皇の一生を振り返っている。

七月三十日。

例によつて芝刈り。終つて桃の木の下で水蜜桃の立喰。(中略)

午後東京から来た学生の一人が、天皇陛下今晚一時三十分崩御あらせられたと云ふ事を告げた。

陛下崩御——其れは御重態の報伝はつて以来万更思ひ掛けぬ事ではなかつたが。

園内を歩いて陛下の御一生を思ふた。

東の方を見ると、空も喪装をしたのかと思はれて、墨色の雲が東京の空を覆ふれ居る。

暮れ方になつて降り出した。

蘆花は明治天皇の一生を思って、なぜこれほどに茫然自失、暗然たる状態に陥つたのか。それは、明治という時代がかれ自身の一生と重なつたからである。つまり、明治はかれ自身のアイデンティティ(存在のありか)にほかならないのだろう。翌三十一日の記述に、そのことが証かされている。

七月三十一日。

鬱陶しく、物悲しい日。

新聞は皆黒縁だ。(中略)明治と云ふ年号は、昨日限り『大正』と改められる、と云ふ事である。

陛下が崩御になれば年号も更る。其れを知らぬではないが、余は明治と云ふ年号は永久につづくものであるかの様に感じて居た。余は明治元年十月の生れである。(中略)余は明治の齡を吾齡と思ひ馴れ、明治と同年だと誇りもし、恥ぢもして居た。

陛下の崩御は明治史の巻を閉ぢた。明治が大正となつて、余は吾生涯が中断されたかの様に感じた。明治天皇が余の半生を持つて往つておしまひになつたかの様に感じた。

物悲しい日。田圃向ふに飴屋が吹く笛の一声長く響いて、腸にしみ入る様だ。

蘆花はこの日の記述の最初と終わりに、「物悲(哀)しい日」と繰り返している。それは、まず、かれが「大好き」な明治天皇が亡くなってしまったと感じたからである。

諸君、我々の脈管には自然に勤皇の血が流れて居る。僕は天皇陛下が大好きである。剛健質実、実に日本男子の標本たる御方である。

つまり、明治天皇の「剛健質実」な生き方、それが「日本男子の標本」のようにおもえて、天皇が「大好き」だった、というのである。

「明治の子」である北一輝が明治天皇を「大帝」と呼んでいたことから明らかなように、明治天皇はその死後、「大帝」と称されることが多かった。これは、すでに紹介している昭和二年刊の『キング』（大日本雄弁会講談社）付録が「明治大帝」と名づけられていたように、昭和はじめには一般化していた呼称だった。

明治天皇に対する神聖視は、「大日本帝国憲法」に「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」とあることで法・制度的に宣言されていた。しかし、それが国民精神の上に定着するようになったのは、やはり乃木希典の殉死が果たした役割がきわめて大きいだろう。もちろん、天皇の死の翌日に『大阪毎日新聞』の第一面に掲載された記事は、ピョートル大帝にならって天皇を「ゼ・グレート」(大帝)と呼んでいた。

天皇の死の直後、雑誌『太陽』（博文館）の臨時増刊号のタイトルは「明治聖天子」である。「聖天子」とよばれたのは、歴代天皇のなかで他にもあり、たとえば百十九代の光格天皇――近代皇室の諸神事・諸行事は、ほとんどこの光格天皇のときに定められた――がそうである。しかし、「大帝」とよばれたのは、明治天皇だけである（松本,2010:422-424）。

原宿表参道を象徴する光景①―【行列のできる店の数々】

原宿表参道にはオープン当時から衰えることなく連日行列の絶えない店が多くある。その客層は主に若い女性達で、休日ともなると待ち時間が1～2時間にも及ぶ長い行列をつくっている。人気があるのはパンケーキ、ポップコーンといった甘いものを販売する店で、その多くが海外に本店を構えている。雑誌やテレビをはじめ様々なメディアで頻繁に取り上げられ知名度は上がる一方となっているが、原宿表参道の店に長い行列ができるのは近年に限ってのことではない。1980年代のタレントショップ大流行やジャニーズショップ原宿店の大行列など、常に人が溢れる場所をもち続けてきたといえるであろう。地域情報サイトでは「日本初出店」や「話題の第一号店」といった記事が連日のように見られるほど進出地としての人気は高く、新しい流行を発信する店舗が次々とオープンして注目を集めるといふ相乗効果が起きている。



資料4-8,4-9 人気パンケーキ店“Eggs ‘n Things”の行列。平日午前中でもこの列の長さである(筆者撮影)

原宿表参道を象徴する光景②—【連なるハイファッション店】

バブルが崩壊した際、原宿表参道も大きな打撃を受けた。地価が5分の1程になった場所も多々あり、空きテナントや放置された土地が目につくようになった。樺会の人々を中心に、まちの人々は招かれざる新顔がビルや土地を買い占めていくのではないかと危惧していた。そのような中、原宿表参道に目をつけて動いたのは、グッチ、ベネトン、ルイ・ヴィトンといった外資系高級ブランドの数々であった。彼らは原宿表参道の景観と環境の良さを認め、特に表参道のケヤキ並木はブランドイメージに合うロケーションをもっているとして、本社を構えたがる会社が次々と現れた。すると今度はこのまままちの大部分が外資系企業に占められてしまうのではないかと不安が広がったものの、買占めラッシュは落ち着きを見せる。現在は外資系のブランドにも樺会の会員になってもらって、一緒に活動している。バブル崩壊によって原宿表参道の姿に大きな変化があったことは確かだが、少なくとも「ファッションのまち」としてのイメージは死守することができたといえる。このハイブランド流入は来街者層の拡大を促し、のちに表参道ヒルズのコンセプトやターゲット層設定にも少なからぬ影響を与えることとなった。



資料4-10 表参道のハイファッション店(右)と1949年からこの地にある美術品店、富士鳥居(筆者撮影)

4-3. 契機年表

西暦	恒常性	牽引性	突発性
1920	明治神宮創建		
1924	原宿駅二代目駅舎竣工		
1926	表参道が風致地区に		
1927		同潤会アパート建設	
...	
1945	明治神宮焼失	ワシントン・ハイツ建設	
終戦 — 駐留軍が原宿に。欧米文化の流入			
1957	原宿が文教地区に		
1958	明治神宮社殿復興	セントラルアパート完成	
1959			建設ラッシュ(青山通り、代々木第二体育館 etc)
1960			
1962		リッチでおしゃれな原宿族	
東京オリンピック開催			
1964			
1967			代々木公園開園
1972			千代田線開業
1973		原宿シャンゼリゼ会設立	
1974		竹下通り元年	アンノン族
1975	多品種少量への希求		ベトナム戦争↓反戦ムード・ヒッピー流入
1977		歩行者天国スタート	
1978		ラフォーレ原宿オープン	
1979	石油ショック②	竹の子族等、若者の流入	
1980		原宿音楽祭スタート	
1983		D.C.ブランドブーム	東京ディズニーランドオープン
1985		原宿シャンゼリゼ会法人化	→修学旅行生の急増
バブル崩壊			
1991			
1993	明治神宮神楽殿竣工、再完成		
1994		終了	
1995		裏原宿にストリート系の店舗増	
1998		廃止	
1999		原宿表参道櫛会へ改称	
2001			よさこいスタート
2002			まちづくり協議会設立
2010			清正の井戸大ブーム
2011	櫛並木植え替えの実施計画		

原宿表参道の歩み

原宿表参道の二大契機は、戦後の文化流入と東京オリンピックの開催であろう。ここでは、原宿表参道の歴史のなかでそれらを含む数々の契機がどう埋め込まれているのかを概観するために、原宿駅開業から「若者の街」のイメージ定着までを今一度さらって確認したい。

元来田んぼや荒れ地があったのみのこの地に旧国鉄原宿駅が誕生したのは1906年のことである。当時は農作物の積み出し駅にすぎなかったこの小さな駅が、100年後には連日大勢の人々が乗降する都内有数の人気を誇る駅となる。

このまちはひとつひとつ歴史を重ね、少しずつ着実に厚みを増してきた。1910年には代々木ヶ原に陸軍練兵場が設けられ、日本で初めての飛行機発着が行われた際には30～50万もの人が見物に訪れたそうである。この頃から、折に触れ人を惹きつける出来事に恵まれたまちであった。

明治神宮造営という国家的プロジェクトが到来し、原宿表参道は厳かで重みのある雰囲気を感じ始めることとなる。それに付随して市として参拝客相手の土産物屋、露天商の姿も見られるようになり、人の流れが動きはじめた。まだ商店が少なく工場も多くはできていなかったこと、整備された広い道路と風致地区指定に守られた静かな環境を有していたこと、都心からきわめて近いことなどから次第にこの地はモダンな高級住宅地としてその名を知られるようになっていった。1927年に同潤会アパートが出来た折には、当時の高所得層の住民達が同アパートは地域の品格を下げるものだとして抵抗を示したと言われている。その風当たりの強さに反して、同潤会アパートは完成後、文化住宅として当時のインテリ、サラリーマン階層の一種の憧れの住居となっていく。ツタが絡まる古びた趣は、のちに原宿表参道の一名所ともなった。

そして第二次世界大戦によって明治神宮の一部と同潤会アパートを残してその大半が焼きだされた苦難の時代を越え、原宿表参道は新たな局面を迎えることになる。以前の陸軍練兵所跡に建設されたワシントンハイツに住んだ駐留軍高級士官とその家族達はこの地に外来文化という刺激を与え、キディランド、オリエンタルバザー、富士鳥居といった現在も残る名物店の数々の出現を促した。従来、神宮を有するため古風で趣きのある地区としての印象が強かった原宿表参道は、敗戦を機にアメリカナイズされた和洋折衷の商店街形成への第一歩を踏み出したといえるであろう。

占領軍滞在により欧米の空気が流れ込んだ原宿表参道だが、戦後期はまだ依然として「静かな」まちとして存在していたと言われている。明治神宮の社殿復興等、急ピッチで復興と発展が進められるなかでこの地はとうとう大きな転換点である東京オリンピックを迎えた。その舞台となったことで、原宿表参道はアメ車が走り外国人将校の子どもたちがキディランドで買い物をする、一種の「のみ込まれたまち」から脱し、文化や発展の主導権をその手に取り戻すことに成功する。この時期に完成したセントラルアパートは、のちに後世まで語り継がれる文化発信の聖地となる。

客層にも変化が見られ、それまでは外国人が大半であったまちの光景は、デザイナー、カメラマン、芸能人等、時代をリードする層の人々が躍り出ることによってガラリと変わった。「リッチでおしゃれな原宿族」と呼ばれた彼等は、枠組のない業界のなかで互いの交流を深め、自由な感覚と勢いをもってこれま

でなかったものを次々と世の中に送り出していった。メディアへの露出効果や千代田線の開通により遠方からの来街者の数も右肩上がりとなり、この頃からまちの求心力は急激に増していく。

同じく60～70年代にはベトナム戦争を受けて反戦ムード、ヒッピー達が流れ込んできたほか、表現欲と才能に富んだ若者達がネットワークを紡いでいき、アパートや倉庫を借りて自ら改造し、デザインから製作、販売までを一貫して行うブティック風の小さな店舗が次々とうまれていった。ほかでは手に入らないものが売っているとしてファッション関連雑誌で紹介されたことを皮切りに、この地の主要客層はヤング層へと固定化していく。1977年から1998年にかけては歩行者天国が人気を集め、竹下通りも年を追うごとに賑わいを増し、若者の来街を促す要因となっていく。その半面、地価や家賃の高騰は若者を次第に追いつめ、従来のブティック商法は衰退を見せる。それに立ち替わるようにして起こったのが大型ファッション店の進出で、ジョセフマグニンジャパンやミッシェールといった大型店が他を駆逐していく。1999年から2010年まで神宮前交差点に店を構えたGap原宿店は人々に強い印象を残し、ファッションスナップ撮影の定番場所としても知られた。近年では明治通り沿いにはファストファッションの大型店が軒を連ね、安価で移り変わりの早い商品が大量に売られている。竹下通りからそれらファストファッション店への人々の移動線も定着しつつあるようにも見受けられる。

その一方で、二度の石油ショックや1990年代初頭のバブル崩壊に際して一部の人々の嗜好には変化が訪れた。大量生産・大量消費のシステムへの反感と多品種少量への希求意識が芽生え、かつてのブティック商法、マンションメーカーを彷彿とさせるような傾向も再び表舞台にあがるべく力をつける様子が見られるようになっていく。清正の井戸の大流行に代表されるスピリチュアルブームや昨今の行列のできる店の数々など、メディアによって拡散されることで大勢の人々をまちに引き寄せるマスの魅力と、キャットストリートや裏原宿に点在する小規模な店舗にこだわりをもって通いつめるコアな魅力とが入り混じり、これまで有していた見どころや客層はそのままに、年齢性別のみならず嗜好の多様性をも更に強化しつつあるといえるであろう。

以上のように、原宿表参道という同じ舞台であっても時期により表舞台に躍り出る人々の性質や嗜好は異なっていることがわかる。ただ、戦後の欧米文化吸収、オリンピック以後の興隆を土台に、正解のない自由さを若者が謳歌していることだけは変わらないといえるであろう。新しいまちであるからこそ、突飛なものや全く新しいものに対しても除外する力が働かず一要素としてのみこむ、その繰り返しによって原宿表参道の多様性・多層性が形成されてきた。

また、かつてはデザイナーやクリエイターといった職業に就いている「個々」が自由に動き回りその総体としての人々のうねり、方向性がまちを動かしていたのに対し、イルミネーションやよさこいなど、まちの大規模なイベントを主催するような母体(原宿表参道櫛会)が年を経るごとに力をつけてきたことで、構成員が増え続ける原宿表参道において緩やかな秩序とまとまりの保持が可能になっている。リーダーシップを発揮する組織とその存在に殆ど気づかぬまま傘下で動き回る個々との間のバランスが確立されつつあるともいえるであろう。大規模に為されるまち全体の運営が安定感と持続性を確保しているからこそ、志をもった人が新しいことを始める隙間・余地が守られているのである。

5章 まちの全体像—原宿表参道の再統合—

5-1. 原宿表参道の求心力の解明

5-1a. まちの人々の目に映る姿

【ワンダーワールド】

原宿表参道の多層性について、稲田表参道町会の会長を務めた半田庄司氏は次のように語る。

「最先端を追い続ける『原宿』だが、その半面、浅草や上野に代表されるような「庶民的な雰囲気」ももちあわせている。昔ながらの銭湯や商店、前掛け姿の主婦の間をブティックの袋をかかえたティーンエイジャーが集団で行き過ぎる。こんなミスマッチ感覚は、この街でしか味わえないものだろう。また、最先端のファッションに身を包んだ若者が行き交う場所で、明治神宮や同潤会青山アパートなどのような歴史的な建物や史跡に出会えるのも、原宿らしさの一面といえる。

『若者文化のオピニオン・リーダー』、『下町情緒』、『歴史』など、いろいろな表情を垣間みせる『原宿』。この街は、多種多様な魅力を凝縮した《ワンダーワールド》といえるのかもしれない。」(半田,1994:2)

原宿表参道にはどのような層の人間でも不思議と溶け込んでしまえる包容力がある。住民の数が減り続けるなかで、「前掛け姿の主婦」の姿を目にすることはなくなったかもしれないが、それでもまちの自由さは健全である。今でも、まちで声掛けをしている美容師達、色鮮やかな服を着てまちを歩く小中学生、ファッション関係者とおぼしき男女、ゆっくりまちを散策する老夫婦、少数のスーツ姿の男性…と実に多様な人々が行きかい、どの層が正しいという解は誰ももっていない。住民や来街者、通勤者といった原宿表参道で時間を過ごす全ての人々を「滞街者」と称するとすれば、彼らはどのような性質を持っていようとパズルのピースのように原宿表参道のどこかに収まるのである。互いを非難・排除しないものの無暗な関わりはもたず、各々が自身の道を選んでいる。

【原宿スピリット】

原宿表参道でスタートを切り、ここでの成功を基にステップアップをしようとする経営者は少なくない。原宿で最初の一步を踏み出したという一種の「ハク」を持ちたがる背景には、この地にそれだけのネームバリューと環境が揃っているはずである。

「原宿表参道で、〈成り上がり〉のストーリーは枚挙に暇がないよ」と山本氏は話す。普段着で銀行に融資を申し出る年商数百億店舗の代表やスケートボードで通勤する社長、全国の修学旅行の幹事役に地道にDMを送って大成功した店舗など、型にとらわれず自分の能力、理想を武器に生き抜く人や企業が台頭してくる舞台だといえるであろう。

日本には“善悪”という古来からの価値観がある。しかし、この街の価値観は〈善い、悪い〉ではなく、〈好きか、嫌いか〉なのだと言山本氏は言う。〈100%の善〉なんてものはありえないけれど、好き嫌いハッキリしていて葛藤がない。人は好きなものに出会うと、ものすごいパワーを発揮する。だとするならば、自分の好きなことをやらせてくれる街、地域も好きになるものだと言(原宿表参道オフィシャルナビ 山本正旺氏インタビュー)。



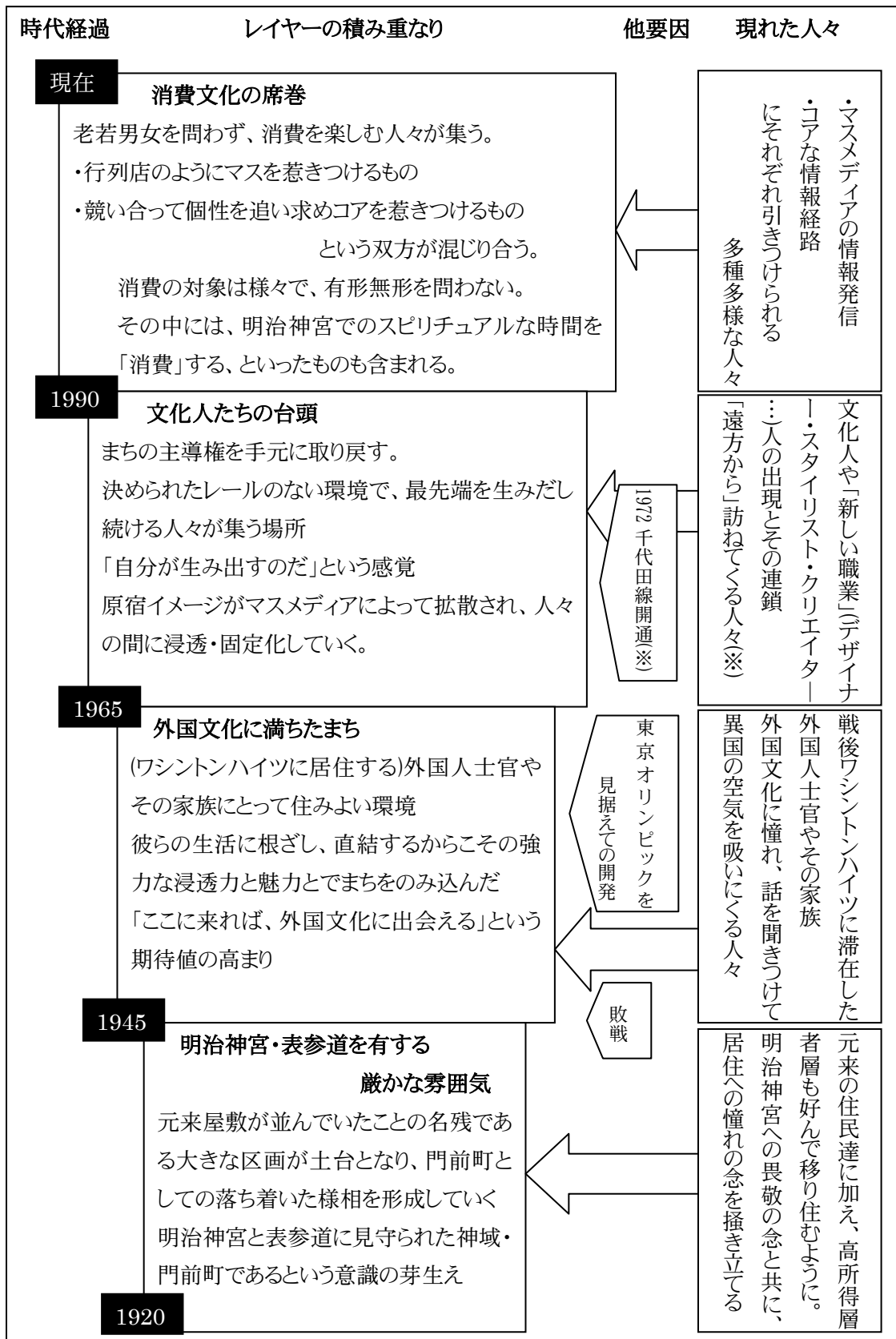
資料5-1 表参道を歩く人々の合間をスケートボードで上手にすり抜けていく男性(左方)

【消費を楽しむまち、原宿表参道】

櫛会理事長の松井氏は、原宿表参道が経験した1960年代以降の発展の根底にあったものは「消費を楽しむ」という志向であったのではないかと語る。戦後、ようやく軌道に乗り始めた発展の途上にあって、ものの価値を安売りするわけではないが「消費を楽しむ」世代がこのまちに集まってきた。商業のボリュームよりも質を重視するような嗜好傾向は、戦前の世代にも戦争直後を生き抜いた世代にもなかった、新しいものだったといえるであろう。「消費にゆとりを感じる・感じさせる世代」には金銭的にも文化的にも余裕があり、外見(ファッション)に攻撃性や「とんがっている」印象がある人であってもその根は豊かさに裏付けられたゆるやかさを纏っている。

渋谷や新宿と比べて必ずしも商業的に有利とはいえない条件の中で、特有のまちのボリュームを最大限活かして生きる道を探ってきた原宿表参道は、いつしか「消費する楽しさを知っている人々」が集うまちとなっていく。1960年代にその空気を謳歌した世代が歳を重ねた今現在もお昔のようにまちを訪れ、他の世代と交じり合うことを可能にしているのは当時彼ら自身が身をもって作りあげた単純なわかりやすさ、美しさ、そして遊び心のある居心地のよさであろう。かつては見られなかったベビーカーを押して買物を楽しむ若い女性達や、2006年の表参道ヒルズ開業を機にまちに見られるようになったという30～40代の男性など、来街者の世代層は拡がり続けている。近年原宿表参道で見かける様々な階層の人々はそれぞれに消費の楽しさを知っているという点で共有できる感覚があり、同じ求心力に引きよせられているのではないかと考えられる。

5-1b. 厚みを増し続けるレイヤー



ここまで繰り返し述べてきたように、原宿表参道は1920年の明治神宮創建を皮切りにその発展の歴史をスタートさせたといえるまちである。以後90年以上の時の経過のなかでまちは不断に様変わりしてきたが、それぞれの時期を席卷した要素はその地位を退いた後どこかへ消え失せてしまうのではない。地層のごとく、新たな潮流がその上にかぶさることで第一線を退いた後もまちの一部として残り続ける。移り変わりの激しい地域ではあるが、要素の使い捨ては起こっていないのである。強固な土台の上に様々なレイヤーが積み重なり、厚みを増していく、その過程のなかに常にいると考えられる。そのことを図示したものが、前頁である。

明治神宮の門前町であり表参道を有するまちであるという意識が厳かな雰囲気を形成し、最大の土台となった初期。従来の住民はもとより、その環境の良さに惹かれ高所得者層が多く移り住んでくことで更に土地の重厚感が増したことであろう。

その後、空襲によって焼け野原になりながらも終戦を迎え、ワシントンハイツで生活する外国人が好む、住みよいまちへとまちは色を変えていく。表参道のケヤキ並木を筆頭とする緑の豊かさやゆったりとした区画といった住環境の良さに磨きがかかり、キディランドや富士鳥居といった土産物店や食料品店など、外国人好みの店の増加が著しく見られた。近隣のまちからは、原宿表参道に来れば異国情緒が味わえると人気になったという。

そしていよいよ、原宿表参道において抜かすことの出来ない発展の重要な契機である東京オリンピックが開催される。建設ラッシュとまちの整備が進められ、戦後復興の象徴ともいえるオリンピックも無事閉幕した後、原宿表参道という舞台で人々が自由に動き始める。戦後20年を迎え、先の戦争を経験していない世代が「消費するたのしさ」を初めて見出し始める。台頭してきたカタカナ職業（デザイナーやクリエイターなど）は喫茶店レオン、セントラルアパートで意見交換と人脈作りに励み、ネットワークを形成していった。彼らが生き活きと活動し、様々な発信をはじめたことは、戦後外国文化にのみこまれていたともいえるまちを再び日本人の手に取り戻し、再スタートを切った証でもあった。それと同時に、千代田線の開通やマスメディアによる数多の原宿特集によって首都圏内各地から原宿表参道を目指して来街者が集結するようになっていった。この時期には、人目を引く文化人・業界人の活躍という密なレイヤーの陰で、大成せず夢を諦めていった者や、ここで小さな夢を見つけた者などこの図では拾いきれない一人一人のドラマがあったことも予想される。

1990年代初頭のバブル崩壊を経て、この地は更に複雑性を増した。戦後の高度成長期に生まれ、まち全体に浸透した「消費するたのしさ」を知る人々を引き寄せるといった性質はそのままに、その消費対象は増える一方となる。若い女性を中心に連日行列をつくっているパンケーキやポップコーンの店は原宿のおすすめスポットとして各メディアに取り上げられ、あっという間に人気を博した良い例である。その他にも日本初出店の新オープンの店などには噂を聞き付けた人々が殺到している。そういったマス向けの魅力に対峙するようにして、コアなファンをもつ小規模な店やスポットも根強い人気を獲得していく。裏原宿やキャットストリートで芽生えた少数消費の嗜好が生き続けており、今もひっそり

と、しかし力強くまちに生きている。その消費のなかには無形のものも含まれる。大行列ができて話題となった清正の井戸に象徴されるスピリチュアルブームは分かりやすい例だが、昨今は明治神宮への若い参拝客の姿も少なくない。神聖に思えるもの、心が安らぐものとして神宮を捉え、そこへと足を運ぶ自分を楽しむという新しい関わり方が若者を中心にうまれつつあるのではないだろうか。

ここまで図を説明するかたちで原宿表参道のレイヤーを述べてきたが、その一層一層は連続するものだけが関連性を持っているのではない。例えば明治神宮や表参道がもたらす雰囲気は外国人を魅了しただけでなく多くの文化人や今を生きる人々に愛され続けているし、戦後の文化流入で形成された文化の混合性と共生は、拡大し続ける現代人の趣味嗜好の広さを受け止める重要な要素として原宿表参道の一部になっている。つまり、それぞれの層が凝固し単に積まれていくのではなく、ひとつひとつが浸透し混ざり合うことでひとつの母体となって次に積まれる要素を待ち受ける、その繰り返しが生きているのではないであろうか。要素が増え続けるからこそ、どのような新要素も拒むことなく受け入れる多層性を可能にしているのだと考えられる。

5-1c. ハレとケ、日常と非日常

ハレとケは柳田國男によって設定された概念で、ハレ(晴)とは祭礼や年中行事、冠婚葬祭など特別な時間と空間のことを指し、ケ(褻)とは日常的なふだんの労働と休息の時間と空間のことを意味する。柳田國男はこのハレとケとの循環のリズムから日本の生活文化が分析できると述べている。ハレが消費と遊興とすれば、ケは生産と労働である(新谷,2001:70-71)。

ハレとケのリズムは、農耕を生業とする日本独特の民俗的な特徴であったが、現代人はその変化やアクセントに乏しい生活を送るようになった。人々の移動距離および範囲の拡張により一人の人間が一生の内に経験する物事は多岐にわたるようになった。加えて、情報化が進み物理的・時間的障害によりうまれる経験差が次第に狭まることで、非日常との出会いで受ける驚きや衝撃が弱まってきた。本論文では、「ハレ=日常」、「ケ=非日常」の概念を採用し、現在の原宿表参道の姿にあてはめて論を進め、このまちの求心力の解明を試みていく。

原宿表参道で生じているハレとケ

原宿表参道には連日多くの人々が訪れる。これまで述べてきたように、その年齢層や所属は実に様々である。明らかに異なるバックボーンや感受性、価値観をもつ人々であるために、その目に映るまちの姿もそれぞれ独自のものと考えられる。ここでは、その違いを大きく「ハレ=日常」「ケ=非日常」に分け、それぞれにとって原宿表参道の主な地点はどのように感じられるのか、多少の偏りが出てくるが可能な限り表にして可視化を試みる。

層/「滞街」目的,場所	「滞街」目的	原宿駅	竹下通り	表参道	明治神宮
住民	居住・買物	ケ	ケ	ケ	ケ
通勤者	仕事	ケ	ケ	ケ	ハレ
来街者(小中学生)	買物	ケ	ケ	ハレ	ハレ
来街者(～30代)	買物	ケ	ハレ	ケ	ハレ/ケ
来街者(40代～)	買物	ケ	ハレ	ケ	ハレ/ケ
明治神宮参拝者	参拝	ケ	—	—	ケ
外国人観光客	観光	ハレ	ハレ	ハレ(→ケ?)	ハレ
修学旅行生	観光	ハレ	ハレ(→ケ?)	ハレ	ハレ

住民にとっては、好む好まざるに関わらず、原宿表参道はその各場所がどのような場所であるかを知り、ある程度の理解をしていることが予想されるため、どの場所もケとなっている。

一方通勤者は、目的地を原宿にするのは基本的に職場が存在しているからであり、日常的に明治神宮との関わりをもつとは考えにくく、関係性が生じる可能性があるのはライフイベントというハレの際である人が多いのではないか。

来街者は年齢別に3区分にした。小中学生にとってお小遣いの許す範囲はおそらく竹下通りでの買い物であり、親等と来る場合を除いては、表参道や神宮で時間を過ごす事は少ないと考えられる。一方、神宮を歩く人々を観察している人を見ると20代とおぼしき人々(特に女性)が多いことに気づく。この頃から、人々は明治神宮の存在と参拝を意識する人とそうでない人とに分化していく。

神宮参拝者は、当然明治神宮やその側の原宿駅をケの場所として認識しているが、表参道や明治神宮にまで足を運ぶとは限らない。移動ルート上に自然に組み込まれることがなさそうなので、ふたつの通りは無記入にしてある。

少々奇妙な分類になりそうなのが外国人観光客と修学旅行生である。どちらも原宿を訪れるのは初めて、もしくは数回目であるため、どの場所もハレの場所となると考えられる。しかし表参道はかつてヨーロッパの通りをその名に戴いていたほどに、その光景にはどこか通じる雰囲気があるという。観光客の出身国にもよるが、外国人観光客にとって表参道が「初めて来た気がしない」「落ち着く」場所へと変化する可能性があるのではないだろうか。同様に、原宿を訪れる修学旅行生は、おそらく雑誌等でその特集や写真を見たことがあり、特に竹下通りに関しては強い憧れと固定化されたイメージを抱いていることが多いと考えられる。竹下通りのようにターゲット層が小中高生という非常に絞られたものである場合、そこに何らかの既視感や親近感を覚え、ケの場のように感じることはないかと考える。

当然、どの層においても個人差や例外が生じるが、最大公約数的にその分類をとるとどの地点にも誰かしらのハレとケが混在しており、各々の所感も扱いも希少さも大きく異なっている。どの場所にも必ず強く惹かれる者がいるのであれば、まち全体で見た時に求心力のムラは少なくなると考えられる。どこにいても強く視線を注ぐ者がおり、かつ同じ場を共有する人々の構成が多岐にわたるのであ

れば、誰かが異様に突出して目立つことはない。どのような者でも全体としての和に埋もれることができ、結果として各々が自らの在りたい様に過ごすことができるまちであるとすれば、原宿表参道の求心力はその対象を全ての人々に拮げたものであり、来街・街滞在の門戸は非常に広いものとなる。

明治神宮がもたらす「ハレ」と「ケ」

そして、改めて捉えるべきは流行の最先端をいく原宿表参道にあって、まちの落ち着きを司る重しのように鎮座している明治神宮。明治神宮はまちの発展を許容しながらその喧噪や混乱からは一線を保ち、例年多くの参拝者を迎え入れる日本屈指の神社として存在しつづけている。急激な発展のなかでも、新宿や渋谷といった近隣ターミナル駅から流れ込む娯楽施設、風俗店といったものを文教地区・風致地区指定をもって阻止するまでの住民および行政の意識の土台に、明治神宮とその参道を有する地域であることが与えた影響は無視できない。神宮はこのまちの求心力にどのような影響を及ぼしているのであろうか。姜尚中氏が原宿について語った言葉の一節を引用する。

「幸いなことに、東京には自然の風景と溶け合った神社や、古い歴史を持ったお寺がいくつも残されています。そして行ったことのある人ならわかると思いますが、これらの空間は「ハレ」と「ケ」を一瞬にして分ける力があるのです。

理由はそこに「神が存在しているから」ということではなく、明らかにそこが普段とは違う、異質な空間だからです。都会の便利さや効率性、あるいはお金に換算できるような価値とは違う、存在するだけで意味がある場所だからです。だから人はそこに行くと、なにか敬虔な気持ちになるし、こうべを垂れたいくなるのでしょう。」(姜,2011:35)

日本人は無宗教とも多宗教とも称されることがあり、その宗教観は常に論議の種であるが、現代を生きる人々は案外摩擦を起こさずに宗教的事物を受けいれているように見受けられる。祭祀施設をダイレクトに「神」や「信仰」に結びつけるのではなく、姜氏が述べているように「いつもと違う」「不思議と気持ちが落ち着く」といった不確かな、それでいてあまり抵抗なく受け入れることのできる感覚をもって寺社に足を運んでいる。実際に神宮を訪ねると、予想外に若い女性やカップルが参拝をしている姿を目にする。宗教意識の曖昧さが年代や宗教的背景を問わず人々の足を神宮に向けさせ、神宮は人々に「ハレ」のひとつ、満足感を与えているのではないかと考えられる。

また、福川・市川(2008)によると、都市空間に魅力を生み出すには、日常と非日常の空間が相互に刺激しあうように組み込まれていることが重要であり、その留意点は以下の5つにまとめられるという。

- 一、日常的な都市空間の創造
- 二、非日常的な都市空間の創造
- 三、都市空間に関する日本人独特の感性
- 四、アクティブ・シニアと呼ばれる新しい高齢者の存在
- 五、工業化の時代に失われたもうひとつの非日常である「身近な緑」の存在

日本人は元来、非日常の典型を緑溢れる寺社とそこでの縁日やお祭り、或いは春の桜や夏の花火といった四季折々の楽しみに据えていた。また白黒の決着をつけたがらない中間領域を非常に大事にするといわれており、「日本人の空間認知は、特定の建物や街路のパターンという点と線でなされるのではなく、人々の活動という時間的推移と空間の接点を面的に捉えることによってなされるのである」(市川宏雄『文化としての都市空間』,2007:39)と説明されているように、都市空間に対する日本人の感性は、街路や建物の構造を通じて明快な都市計画を目指す欧米の基準とは必ずしも同一ではないとされている(福川・市川,2008:233-236)。

原宿表参道は土着の大々的な祭や所縁のある歴史人物を殆どもたない。しかし、まちの価値を高め人々がまちに抱く愛着を喚起するためには何らかの「物語性」が必要となる。そこでまちと人々を繋げる役割のひとつを果たしうるのが明治神宮だとはいえないであろうか。大正時代初めに創建された神宮は綿密に練られた計画によって実現した見事な森と荘厳な雰囲気をもって人々に非日常性を提供する。また夏には、神宮内も演舞会場となる明治神宮奉納のよさこい祭によって明確な非日常性やまちと神宮との親和性を人々に印象づける。由来を知らない若者も増えてはいるが神宮とそこから伸びる参道という恵まれた空間、そして例年大変な賑わいを見せる初詣や日常的にしばしば行われる参拝といった日本人独特の宗教意識とが結びつく場として、明治神宮は原宿表参道に重みと魅力を与えている。

5-1d. 空間的特性

人々の交錯地点、神宮前交差点

原宿駅、明治神宮、表参道、竹下通り、明治通り…。住民はもとより、原宿表参道には実に多様な人々が訪れる。その来街目的/滞街目的、移動の目的地は様々であり、人々は各々お決まりの、或いは気ままなルートで街中を動き回っている。その移動線が交わる地点として考えられるのが、神宮前交差点ではないであろうか。ラフォーレ原宿、東急プラザ原宿表参道、ジョナサンや焼き肉店等の飲食店が入る松井ビルを有し、表参道と明治通りとがぶつかる交差点である。

JR原宿駅から向かってくる人々/JR原宿駅へと向かっていく人々、明治神宮参拝後の人々、竹下通りを抜け明治通りに出て道なりに進んできた人々、東京メトロ千代田線/副都心線明治神宮前駅の出入り口から地上に出たばかりの人々、東急プラザの前のスペースで誰かを待っている様子の人々、表参道のプラスバンドに腰掛け、或いは交差点に佇み何をすることもなくまちを眺めている人々…枚挙に暇が無いほど多数のベクトルが蠢き、互いの存在をかすめあい、どこかへ消えていく。

東京には広場がない、と言われる。ここでいう広場とは、ヨーロッパの都市にはまず間違いなく存在するような、人々がごく自然に集い、腰かけ、佇むことができる場所、まちの顔ともなる場所のことである。神宮前交差点は、完全型とはいえずともそのような広場機能の一部を有しているのではないであろうか。それはいわばまちの心臓部、ポンプとなって人々を次の地点へと押し出す役割である。



資料5-2 神宮前交差点(筆者撮影)

5-2 総体としての原宿表参道

5-2a. 「洗練された、自分達のまち」意識とそのイメージ醸成

5つのコンセプトから眺めるまち

「5-1原宿表参道の求心力の解明」では、4つのコンセプトのもと、原宿表参道を概観した。「まちの人々の目に映る姿」「厚みを増し続けるレイヤー」「ハレとケ、日常と非日常」「空間的特性」の4つである。ここに、3章で登場した3大要素「恒常性」「牽引性」「突発性」のコンセプトも加えて、原宿表参道というまちを眺めたい。レイヤーの説明で述べたように、原宿表参道の要素は入れ替わり立ち替わり発生しては消滅する、という繰り返しを続けているのではない。土地に滲みこむように、時代ごとに生まれたひとつひとつの要素は土台としてまちの根底に加わっていき、時を経るにつれまちの門戸を広く、そしてその包容力を強いものにしていく。それはハレとケのコンセプトにおいても、3大要素のコンセプトにおいても同様である。来る者を拒まない多層的なまちであることの正体は、吸収力の強さとまちの成長方法におけるぶれの無さではないであろうか。明治神宮は2020年に創建100周年を迎える、神社としては歴史の浅いものである。その神宮に付随するかたちで時代の変遷を経験してきた原宿表参道もまた、東京の他のまちに比べると若い、しがらみの少ないまちだといえるであろう。そうであればこそ、厳かな明治神宮を有するまちとしての守りは保持しつつもそれにそぐわないものでない限りは新しいものを拒まず取り入れていく。一見すると長い長い歴史を有しているようなイメージをもたれやすいまちでありながらその成長過程はいまだ途上にあるために、常に生命体のように呼吸し、吸収しつづけているまち、それが原宿表参道だといえるであろう。

実際に明治神宮は、2006年の原宿表参道アカリウム、2008年の明治神宮夜の絵葉書プロジェクト、明治神宮御社殿復興50周年記念アカリウム等、まちからの働きかけにより照明とのコラボレーションに共に取り組んだり、年に数回夜間参拝の機会を提供したりするなど、譲歩と協力の道を歩み始めている。2006年のアカリウムでは、原宿表参道はもはやパリのシャンゼリゼ通りの背中を追わなくともよい、明治神宮の参道であるのだからその独自性を追求していけばよい、という考えのもと、行灯をイメージした和の灯りをケヤキ並木に設置した。2008年夜の絵葉書プロジェクトでは、強い光で照らすのではなく「闇のライトアップ」と称して柔らかな光で明治神宮をライトアップし、その新たな魅力で人々を魅了したという。普段夜間参拝は認められていない明治神宮だが、しばしばこのように広く開放されることで、まちとの共生の新たな在り方を探っていくことができると言えるであろう。

単一のルールのもと整然としているわけではないが、それでもどことなく調和がとれているまちだと言われる原宿表参道。建築家である古谷誠章氏はそれを「連歌のようなまち」と表現している。各々の要素が前のものを受けて変化し、全体を俯瞰するとしなやかに姿を変えていくように見えるまちだという。伝統的な秩序と、技術や知恵によって新たに生み出されるものとが混在する原宿表参道では、誰も想像しなかったようなものが生まれ続け、決して人々を飽きさせることがない。



資料5-3 「表参道 akarium」のライティングイメージ(レッツエンジョイ東京HPより)

日本橋との比較から見えてくる「原宿らしさ」

表参道にも店を構えるフルーツ専門店「京橋千疋屋」は1960年代から原宿表参道との関わりを持ち始め、原宿シャンゼリゼ会の設立にも関わるなど長い間その変遷の歴史を見守ってきた。ヒアリングに応じてくださった江森氏によると、日本橋と原宿表参道双方の商店会に属しているとその違いは如実に表れているという。日本橋には元来小売業の店主の集まりやネットワークがあり、商店会はあくまで後付けでそれにかぶせるようにして生じた形である。一方原宿表参道は商店会を形成することでその歩みを揃えようと奮闘してきたまちであるためその構成員も商店主一色ではなく、個人のビルオーナー、商店主、そして近年増加傾向にある大手資本の三者林立となっている。商いの場が昔からあり封建的な気質をもつ日本橋とは対照的に、封建制を壊し近代的なもの、新しいものをつくっていく気風に満ちているのが原宿表参道ともいえるであろう。

会としてのスタンスにも商店会としての老若、構成員の多様性の有無は影響を及ぼしている。日本橋ではそのスタンスと目的は商いをする身として真っ先にあげられる「集客性向上」に完結しているのに対し、原宿表参道はその活動に様々な意味を見出している。日本橋では日常の商いの延長線上にイベントがある一方で、原宿表参道で大規模なイベントを年に何度も開催することには、一過性ではあるが人々の足を向けさせてまちを知ってもらい、イメージを植え付けるといったコマーシャルの意味合いが強い。その違いはイベント当日のまちの様子を見ると一目瞭然である。日本橋では各店店主は商売の勝負の日といわんばかりにスーツを着込み、各々の店で待機するのだが、原宿表参道では、店主や社長といった立場の人々もスタッフとしてお揃いのTシャツを着て本部テントやその他イベントの現場で汗を流して働いているのである。客層が明確に分かれ、目当ての店も人によって全く違う原宿表参道では、来街者に「自分のまち」であるという意識を抱かせ、ここには自分の居場所があると感じさせることが非常に大切になってくる。重役に就いている人々もイベントの運営に自ら携わる姿からも、各層の人々が区別なくまちに関わりその多様性を体現していることが分かる。このまちには様々な階層から人々が集まってくるが、全体としての評価は「洗練されたまち、おしゃれなまち」であることが多い。その構成要素は決して全てが洗練されているものではなく、雑多なものが入り混じっている部分もあるのだが、そういったものを排除するのではなく受け入れ、「洗練された」イメージの漂う全体像に呑みこんでいく強さがある。摩擦なくその中に呑みこまれた人々は、結果的に各々原宿表

参道を「自分のまち」だと感じるようになる、というメカニズムが働いているのだと考えられる。

5-2b. 原宿表参道が抱える課題と今後の姿

時代によってその表舞台に立つ人々が入れ替わりながらもその強い求心力を保持し続けている原宿表参道ではあるが、次のステップへの飛躍や山積する問題への解決方法の模索を迫られている。原宿表参道の商圈は「表参道の大人ラグジュアリー系、明治通りのマスファッション系、裏原宿のストリート系、竹下通りのティーンズ市場系から構成されている」(増淵,2012:98)が、経済の低迷を受けて裏原宿では衰退、空き店舗の増加がみられるほか、表参道でも空間構成の変化が続いている。明治通りに並ぶファストファッション店は賑わいを保持しているがそれは新宿や渋谷といった周辺商圈との同質化を意味するものでもあり、路線選択によっては「原宿カルチャー」と呼ばれるオリジナルティや本来の魅力を失いかねない。

樺会の視点からみる課題

まちの重要なアクターとして活動を続けてきた樺会の在り方にはどのような問題が潜んでいるのであろうか。遡ること40年前、原宿シャンゼリゼ商店会(当時)は既に「道路問題」「環境整備」の2項目を中心に据え改善を試みていたが、現在にも続く課題を明確に把握し以下のように示している。

「本商店会の今後の具体的な課題は以上の2点であるが、これらの他に商店会として終始変わらず、かかえていかざるを得ない問題としては

- 1、商店会の組織としてのメリットについて
- 2、今後の街のあり方—いかに競合する街々と合して街造りをしていくか—に限られている。

1、の組織としてのメリットであるが、これは街全体が小規模なうちは問題ない事であっても、これが発展することで街として成長を遂げると、店舗ごとに処理できない諸々の問題が生じてくる。従って大衆化しつつある傾向があってそこに“街”としての性格が要求される—特に原宿については様々な要因から既に性格を持っている—ため、これを維持していく上での組織の存在は大きい。

第2に競合する街々に対応する今後の原宿の街づくりであるが、これについてはどこの加盟店舗の意見からも判断できるように、昔の、大衆化される以前の原宿の姿に戻すことが必要であり、恵まれた立地条件と豊かな自然環境とファッション性に富む来街者をこのまま維持していけるような店舗設計あるいは街づくりが要求される。」(原宿シャンゼリゼ商店会,1974:37-38)

上記文章中でも危惧されているように、現在まちのアクター、樺会の会員の規模や関与の度合いの振れ幅が広がり続けており、負担にしろ利益にしろ、その分配を決定することが非常に難しくなってきた。大規模な組織力と経済力で数々のイベントを主催し、まちの美化運動にも尽力してきた樺会だが、規模の大きさゆえその維持と管理は至難の業である。スーパーよさこいを始め、営利目

的ではないイベントを数多く行うなかで、その規模、立地により警備等諸経費のかさむ実施を継続していくことは容易ではない。また会員の構成において土地に愛着のある個人のビルオーナーや経営者の割合を大手資本や新来の経営者の割合が逆転していくことで、まちへの長期的投資への理解が得られにくくなってきているという。短期的なスパンで利を得ることを会加入の目的とする企業が増えるなかで、理解と協力を請うていくのは難しい取り組みである。しかしその多様性こそがこのまちの特徴でもあるため、今も昔も櫛会は統一を目指すのではなく包括するまとまりの構築を進めていくことに意義を見出している。

櫛会は「人の力」に立ち返ることで問題解決への糸口を見つけようとしている。適材適所の考えに基づきまちの他の会との調和と共存共栄を図っている。たとえば町会の運動会やおまつりの御神輿担ぎ、区への申請の後押し等協力すべき部分には快く力を貸す。櫛会は資金力を生かして大きいこと、大規模なイベントをやる。その代わりに清掃隊 150 人・水補給 80 人など人員面、マンパワーでの協力を受ける、といった協同関係である。中心的に動く櫛会と、協力的に動く町会という構図が固まりつつある。今後も、どういうまちにするか、先を見越して住民の声を聞き取っていく必要があると考え、どのアクターをも置いてきぼりにせずに進めていかねばならないという意識がつつくある。人にやさしく、よいまちへ。その点で評価されるまちを目指すという。

会の方針にもあるように、原宿表参道の根本であり最も重要なものは「人」の存在である。恵まれたハード面を有していながらも形骸化することなく戦後の発展を重ねてこられたのは、重点を人に据え、中心にしてきたからではないだろうか。来街者は原宿表参道に詰まっている、各アクターが為した痕跡や可視/不可視のものを意識せずに街を楽しむことができる。人々が無意識に享受できる程に浸透し、全体としてまちの求心力や包容力に繋がっている各要素の在り方が多層性の鍵であり、その多層性は無限に細分化することが可能であるにも関わらず分断することが決してないのである。

生活の場としての原宿表参道

原宿表参道の弱点とされるのは、生活に際しての買回り品の購入場所に乏しいことである。実際に住民の声に耳を傾けると、よほど愛着があれば話は別だが原宿は単純に住みにくいという意見も聞こえてくる。魚屋、豆腐屋と生活用品を売る店が次々と店仕舞いをし、平成2年に最後の砦であった八百屋が姿を消してしまった。スーパー、生鮮品を売る店がなく渋谷や新宿、青山のデパートまで買いに行くことになるという。またまちを守ってきた文教地区・風致地区の取り決めが縛りとなって、健全な文化施設や外国人観光客を受け入れる良質なホテルの建設までもが阻まれている。経済の底冷えやグローバル化の波のなかで、まちとしての魅力、競争力の向上のためにも文化のよい側面を取り入れたいという声が各所であがっている。

しかし上に挙げた弱点は、必ずしもまちの発展の足枷になってきたとは言いきれない。日用品を買い求める場所の欠落が生活感の無さや洗練されたイメージの醸成に一役買っていたともいえる。徹底した文化施設排除が、東京のこの場所にあってもなお治安の低下を免れることを可能にしてきたとも考えられる。バランスを保ちながら時代に適応していくことが求められている。

原宿表参道を前進させるもの、その未来

榊会理事長松井氏は、モータリゼーションを経て日本の都市もいずれは原点回帰、歩行者優先へと方向転換をするのではないかと考え、表参道を日本初の「公園通り」(park avenue)にしたいと話す。東京の要所にあつて日本の時代の影響をも多分に受けてきたこのまちは、同時に日本の都市の在り方に提案をできる立場にもいる。その後押しをするのが2020年開催予定の東京オリンピックとなることは想像に難くない。モビリティ向上に向けた歩道橋から横断歩道へという動きは既に始まっており、JR原宿駅前の歩道橋は撤去工事に入っている。この工事が行われることで、神宮からの流れが景観的にも、眺める人の心情的にも寸断されなくなるとも言われている。東京都が明治通り拡幅計画を提示しているほか、JR原宿駅周辺も観客を迎え入れるべく動き出しているという話があり、今後数年間でハード面に少なからぬ変化があることはまず間違いないと言ってよいであろう。

今までのような車優先の論理ではなく人を第一に考えるまちへ、という方向性が成熟都市東京の次向かうべき姿のひとつとなるのであれば、原宿表参道はその先駆者となることが予想される。その可能性が決して低くないことを考えると、まちの不動の顔ともなっているケヤキ並木の扱いも含め、今後の動向は非常に慎重に探っていくべきである。それは、まちが有する要素のソフト面・ハード面といった区別を超え、ライフスタイルや価値観の変化にも影響を及ぼしうるであろう。モノが溢れ、選択肢も湧くように増え続け、そのどれもが不変性を持ち得なくなってきた昨今、最早「主流」と「それ以外」という区別はふさわしくないのかもしれない。そうであればこそ、一定の注目度をもつひとつのまちが社会に何らかの方向性を発信することには少なからぬ需要と責任があるともいえる。東京という大きな括りのなかで原宿表参道というまちが挑戦と発信を続けていくことで、正解のない選択を迫られる人々にヒントや気づきを与えることができるからである。

朝夕は散歩する人がいて、日中には賑わいがある。夜は健全な明るさと人々の往来を有する。絶妙なバランスのとれたこのまちは、一日中、あるいは何曜日でも異なる味わいを楽しむことができる。まちを訪れる人々の年齢層が徐々に広がり新たな局面を迎えつつある原宿表参道。まちの規模や可能性が膨張を続けるなかで、その舵取りを担うべきは当然単一のアクターや組織だけでなくまちに足を運ぶ人、関わる人すべてであるといえるであろう。彼らと彼らが生み出すものこそが「まち」の正体でもある。更にいえばその舵取りは意識的に練り上げ、全ての段階でコンセンサスを取りながら為されていくものではなく、人々の願望や時代の要求が反映され、誰かに望まれるものが誰かの手によって生み出されることの繰り返しそのものなのである。原宿表参道には変わらぬ土台があり、その上で不断に動き続ける新旧様々な舞台があり、人々はその舞台上で時に演じ、時に何かを感じ取り、汲み上げ、また新しい波を呼び寄せていく。恒常性、牽引性、突発性。それぞれの要素の動きに伴う力は何かを消し去ったり潰したりするために使われるのではなく、あらゆるものをのみ込んで新しいものへと繋げていく正のベクトルに集約される。それが、重層的なまち原宿表参道の衰えることのない魅力、そして人々を惹きつけてやまない求心力の正体である。

終章 まとめ 終-1. 総括

本論文ではその題が表しているように、原宿表参道というまちの重層性に着目し、多様な要素で成り立っているまちの姿を可能な限りありのまま描きただすことを目標に論を進めてきた。

序章では調査研究にあたってその対象地や筆者の問題意識、調査目的、調査方法や論文形式といった論文の土台となる部分を説明した。まちの各要素を「恒常性」「牽引性」「突発性」の3つの性質に分類しそれぞれの理解を深めることで多方面から原宿表参道というまちを眺め、その重層的な在り方とハード・ソフトを問わぬ相互作用のメカニズムを明らかにしたいという調査目的を提示した。

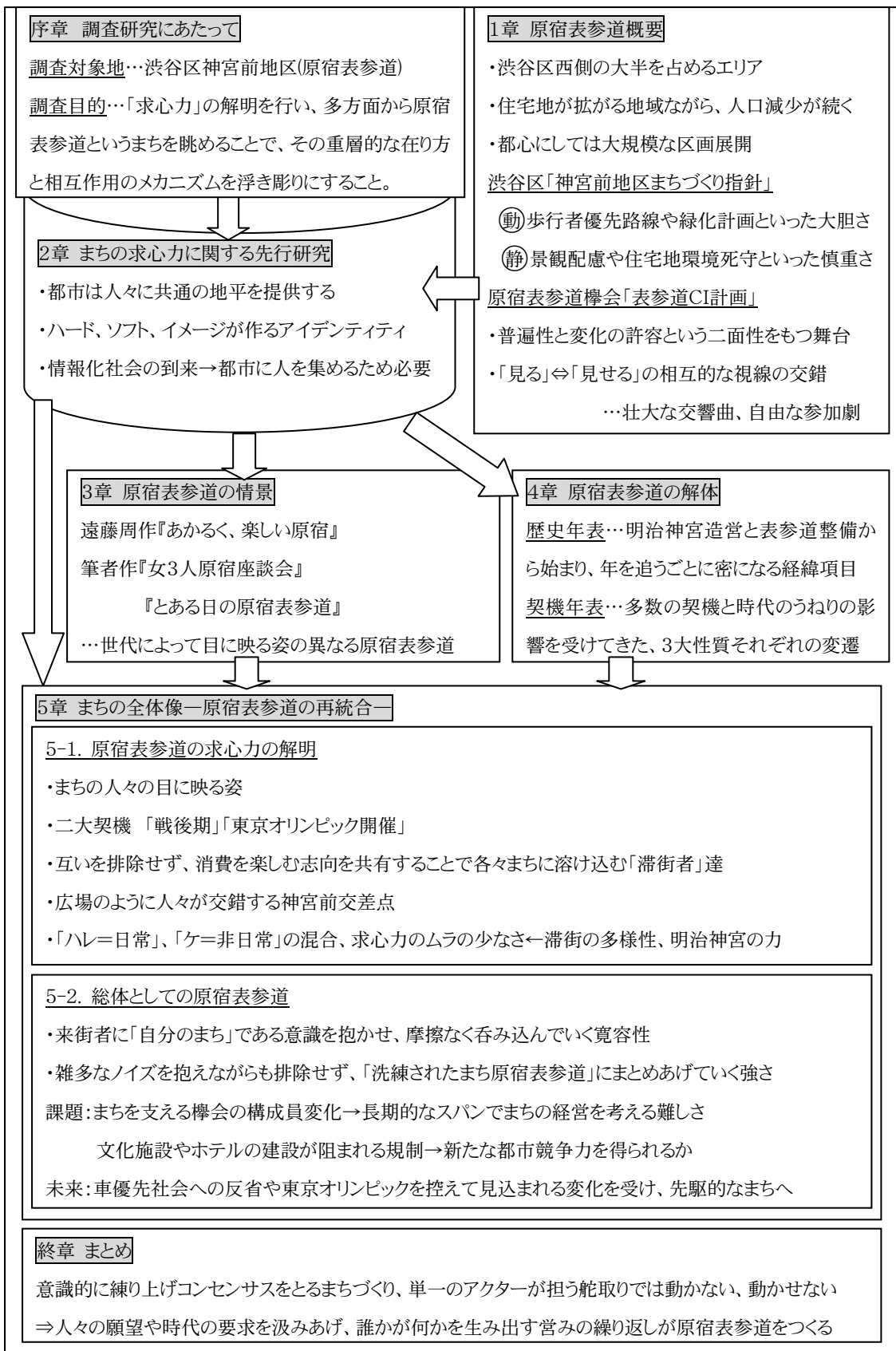
1章では原宿表参道の基本情報や沿革・歴史のほか、骨格、下地となっている各仕組みを紹介した。このまちが住と商とのふたつを大きな軸として成り立っており、シティ・アイデンティティという明確なビジョンをもって推し進められていることを示した。

2章では都市の求心力とは何かを掴むため、先行研究に触れてそのキーワードをさらった。そこで出てきた概念を念頭に、3章では原宿表参道の情景と称して遠藤周作氏の短篇の引用や筆者が自らまとめたエッセイ調の読み物や座談会形式の短い会話を挟むことで、まちの各要素を紹介し、4章以降を读者が読み進めるにあたってそのイメージを筆者と共有できるよう促すことを試みた。人々が各々異なる風景を見ており、原宿表参道は切り口によって様々な顔を見せることを读者に感じてもらえたことを願う。

4章では原宿表参道の要素を「恒常性」「牽引性」「突発性」の3大要素に分類し、年表と共にそのまちの歴史・流れを確認した。各要素がそれぞれに多様な出自と関係性をもっていることがわかるであろう。若いまちだと称されることの多い原宿表参道だが、「恒常性」をもつ各要素は継承していくべきまちの姿を維持すべく鎮座しており、「牽引性」に無暗に引きずられてまちとしての個性を失わぬようブレーキをかけている。「牽引性」要素の数々は常に新しい一面を発信し、時代の先端を走っていることをアピールすることでまちに新たなアクターを呼び寄せ、いつでも旬のものが揃う原宿表参道の求心力を磨いている。前進する「牽引性」と踏ん張る「恒常性」の二つのベクトルの動きに刺激と新しい風を吹き込むのが「突発性」である。短いスパンでまちに影響を与えるイベントやブームの数々は、その一過性をプラスに転じさせ吹き溜まりを無くす風のようにまちを吹き抜けていく。

年表については時系列的にまちを眺めるため、歴史年表と契機年表の二種を用意した。歴史年表は通常の形式をとっているが、契機年表ではやはり「恒常性」「牽引性」「突発性」の3分類を採用し、地域の出来事のみならず日本全体に起きたことや印象的な事件と絡めながらどの事象がどの事象と同時期に起き、関連しあっているかが一目でわかるようにした。

5章ではそれまで記述してきたまちの姿を再度統合し全体像を確認できるよう、都市、まちという俯瞰の目線で原宿表参道を眺め、書き表した。そもそも都市とは何か、都市の魅力とは何であるかという疑問の解消に始まり、都市の求心力の正体、原宿表参道にある求心力とはどのようなものなのかを先行研究を交えながら論じた。そこでは題名にも使用している「ハレ」「ケ」の概念を登場させ、原宿表参道が人によってその姿を不断に変えていることを示した。日本橋との対比で、何故多層性を抱えながらもこの地が一定の雰囲気を保っているかを説明したのち、その課題、今後の姿として原宿表参道が人優位の社会の先駆けになるべく動いているということ、その意味について述べた。



終-2. 謝辞

物ごころついた頃から小学生6年生頃まで、毎年夏休みになると両親と妹、そして幼馴染の家族と一緒に代々木第二体育館で上演されるアイスショー、「ディズニーオンアイス」を見に行くのが恒例行事となっていた。ショーが終わって涼しい会場から出た時に浴びる真夏の太陽の焦げ付くような暑さ、そしてその後昼食をとるために二家族で歩いた表参道の櫺の青々とした緑や人の多さ、立ち並ぶ店ひとつひとつの小綺麗さに毎回目がくらくらしていたのをよく覚えている。中高生の頃にはジャンプショップの長い行列に並んだこともあり、裏原宿の小さなセレクトショップで母親に買ってもらった赤い靴は大学に入ってから大切に履いていた。

思い返せば幼いことから所々に接点は幾つもあったのだが、原宿表参道は憧れの念を抱く一方でどこかすましたまち、近寄りがたいまちというイメージもあったように思う。それでも、どっしりと構える明治神宮に惹かれ、また神宮を有するダイナミックなまちである原宿表参道に関心を抱き、3年生の秋冬から一貫して飽きることなくこの地を眺めてこられたのは幸せなことであろう。卒業論文でその姿を追うにあたり、その資料の多さ、まちの構成要素の多さに驚いた。自分が見ていたのはほんの一部だとわかり、膨大な数の資料に埋もれながらもひとつひとつを興味深く、大切に感じながら読み進めた。力不足により全てを的確に論文へと落とし込めてはいないことが無念だが、折に触れ読み返し、新たな発見を重ねていけたらと考えている。このまちは何かに依存したり寄り寄りすることなく凛と存在しているが、どのような来街者のことも拒絶はしない。拙い論文ではあるが身をもってその特性を理解できたように思う。

論文執筆にあたりまちの生の声を聞きたい、真の姿を見たいと櫺会に飛び込んで数カ月。刺激的な日々のなかで原宿表参道のなかに渦まき葛藤やキーパーソン達の魅力、多層性を言い表す難しさなど数多くのことを学んだ。春から秋へと、あっという間に時が過ぎていった。大学最後の夏休み、エネルギーに溢れた原宿表参道というまちに毎日通ったこと、よさこい祭本番のわくわくする高揚感を忘れずにいたいと思う。事務局に関わらせていただくことで知りあうことのできたまちの方々に、心から御礼を申し上げたい。ヒアリングに何う先にはそれぞれ、自分もいつかこうなれたらと、目指したくなる素敵な方々がいらして毎回背筋の伸びる思いがした。未熟な一学生を受け入れ、おしみなく学びの場を与えてくださった方々のおかげで、二度とない貴重な数カ月となったことを実感している。

最後に、構想に悩んだ際も否定はせず、そのアドバイスにヒントをちりばめながら見守ってくださった浦野先生、励ましの言葉と期待を寄せてくださり今は社会人となられた先輩方、2年間共に学び、笑い、刺激を与えてくれた同期のゼミ生、どの発表にも真剣に耳を傾けてくれた3年生の皆様深く感謝の意を表したい。とても敵わないと感じる同期ばかりのこのゼミで過ごした日々を、卒業してからも懐かしく思い出すことであろう。ゼミ論文との長い付き合いは、先生、先輩、友人、後輩、そして家族と、周りにいてくださる方々がいたからこそ続けてこられたのだと思っている。

皆さま、お世話になりました。本当に、ありがとうございました。

終-3. 引用・参考文献

- 相川貞晴・布施六郎『代々木公園』(1981東京都公園協会監修・東京公園文庫27)
- 家城定子『原宿の思い出』(2002,講談社出版サービスセンター)
- 井口典夫『成熟都市のクリエイティブなまちづくり』(2007,宣伝会議)
- 猪瀬直樹『ミカドの肖像』(1986,小学館)
- 今泉宜子編『明治神宮戦後復興の軌跡 いとも厳しく美はしく社殿成りて 代々木の杜と鎮座地渋谷 焼け跡からの再生物語』(2008,鹿島出版会)
- 今泉宜子『明治神宮 「伝統」を創った大プロジェクト』(2013,新潮選書)
- イーファー・トゥアン『空間の経験 身体から都市へ』(1988,筑摩書房)
- 内山正雄・蓑茂寿太郎『代々木の森』(1981東京都公園協会監修・東京公演文庫20)
- ウィリアム・H・ホワイト『都市という劇場』(1994,日本経済新聞社)
- エドワード・レルフ『場所の現象学 没場所性を越えて』(1999,筑摩書房)
- 小倉慈司,山口輝臣『天皇と宗教』(2011,講談社)
- 加藤明『原宿物語』(1986,草思社)
- 川島蓉子『TOKYOファッションビル』(2007,日本経済新聞出版社)
- 姜尚中『トーキョー・ストレンジャー 都市では誰もが異邦人』(2011,集英社)
- 月刊「環境ビジネス」編集部『原宿 Eco ものがたり すべての原点は原宿表参道けやき並木』(2004,株式会社宣伝会議)
- 小泉宜子『明治神宮戦後復興の軌跡』(2008,鹿島出版会)
- 五来重・桜井徳太郎・大島建彦・宮田登編『講座・日本の民俗宗教① 神道民俗学』(1979,弘文堂)
- コーリン・ロウ・フレッド・コッター『コラージュ・シティ』(2009,鹿島出版会)
- 佐藤圭亮・丸茂潤吉『日本の特別地域⑥ 副都心編 東京都渋谷区』(2008年,マイクロマガジン社)
- サントリー不易流行研究所編『都市のたぐらみ・都市の愉しみ 文化装置を考える』(1996,日本放送出版協会)
- 清水馨八郎・服部銈次郎『都市の魅力』(1970,鹿島研究所出版会)
- 商店街振興組合原宿シャンゼリゼ会『原宿1993』(1994,大津印刷株式会社)
- 新谷尚紀『民俗学がわかる事典』(2001,日本実業出版社)
- 高橋靖子『表参道のヤッコさん』(2012,河出書房新社)
- 田村明『まちづくりと景観』(2005,岩波書店)
- 堤和彦『NHK「COOL JAPON」かつこいいニッポン再発見』(2013,NHK出版)
- 都市新基盤整備研究会『都市の未来 21世紀型都市の条件』(2003,日本経済新聞社)
- 中筋直哉・五十嵐泰正編『よくわかる都市社会学』(2013,ミネルヴァ書房)
- 博報堂生活総合研究所『タウン・ウォッチング 時代の「空気」を街から読む』(1985,PHP 研究所)
- 橋爪紳也『集客都市 文化の「仕掛け」が人を呼ぶ』(2002,日本経済新聞社)

橋爪紳也『ゆく都市 くる都市』(2007,毎日新聞社)
原宿表参道櫛会『原宿表参道』(2004年,榊出版社)
原宿表参道櫛会『原宿・表参道2013(仮称)』(2013年12月発刊予定,草稿)
原宿シャンゼリゼ商店会『ファッションタウン分析レポート 原宿シャンゼリゼ商店街』(1974年,富士経済株式会社)
半田庄司『原宿1995』(1994, 穂田表参道町会)
広島市現代美術館 監修『路上と観察をめぐる表現史 考現学の「現在」』(2013,フィルムアート社)
福川伸次・市川宏雄編『グローバルフロント東京』(2008,都市出版)
増淵敏之『路地裏が文化を生む! 細街路とその境界の変容』(2012,青弓社)
松本健一『明治天皇という人』(2010,毎日新聞社)
宮地正人『21世紀歴史学の想像2 国民国家と天皇制』(2012,有志舎)
森川嘉一郎『趣都の誕生 萌える都市アキハバラ』(2005,幻冬舎)
安丸良夫『近代天皇像の形成』(2007,岩波現代文庫)
山口輝臣『明治神宮の出現』(2005,吉川弘文館)
吉原直樹『時間と空間で読む近代の物語』(2004,有斐閣)
吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー 東京・盛り場の社会史』(2008,河出書房新社)
米山俊直・橋本敏子『生活学のプラクシス 生活史による「新大阪」の研究』(1990,ドメス出版)
若林幹夫『都市のアレゴリー』(1999,INAX出版)
若林幹夫『都市への/からの視線』(2003,青弓社)
早稲田大学文学部社会学研究室『原宿』(2002,文栄株式会社)
渡邊直樹『宗教と現代がわかる本2009』(2009,平凡社)

e-MOOK Choosy chu (宝島社ブランドムック) 一原宿の新名所!「東急プラザ 表参道原宿」に登場したセレクトショッパー

許伸江「都市型クラスターの地域ブランドカー原宿地域にみる複合サブクラスターのダイナミズム」(2005,『三田商学研究第48巻第1号』,慶應義塾大学)

三田知実「文化生産者による文化消費者の選別過程—東京渋谷・青山・原宿の『独立系ストリート・カルチャー』を事例として—」(2007,『応用社会学研究2007 No.49』立教大学)

DVD『奇跡の杜 明治神宮』

写真資料 原宿表参道櫛会所蔵 「50年記念パネル展」

東京都総務局 東京都の統計

<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/juukiy/2013/jy13q10501.htm>

原宿表参道オフィシャルナビ <http://omotesando.or.jp/jp>

やまごころ.jp トップインタビュー<http://www.yamatogokoro.jp/interview/index23.html>

山梨県立博物館かいじあむHP<http://www.museum.pref.yamanashi.jp/index.html>

glitty 「パワースポット、清正の井戸」は誰が広めたのか

http://www.glitty.jp/2010/02/004344post_1123.html

Harajuku Super Station <http://www.harajuku-ss.com/news/2001012news.htm>

レッツエンジョイ東京HP「表参道 akarium」<http://www.enjoytokyo.jp/events/event/55655/>

(※HP等の最終閲覧はいずれも2013年12月10日)